平成29年（2017年）度

インターンシップ報告書

茨城大学人文社会科学部

目　　次

●平成 29(2017)年度　インターンシップを終えて　人文社会科学部長　佐川　泰弘…… 1

●平成 29(2017)年度　人文社会科学部におけるインターンシップ　教授　井澤　耕一…… 2

●インターンシップ報告書（第 1 部：公的機関インターンシップ）
◇公的機関でのインターンシップ体験を通した学び　准教授　本山　宏希…… 5
（都道府県）
◇茨城県庁・県機関…… 6
◇栃木県庁…… 7
（市町村・県内）
◇つくば市役所…… 9
◇那珂市役所…… 10
◇日立市役所…… 12
◇常陸太田市役所…… 13
◇ひたちなか市役所…… 14
（市町村・県外）
◇山武市役所（千葉県）…… 15
（政府機関）
◇厚生省　水戸公共職業安定所（ハローワーク水戸）…… 16
（国際協力・国際交流）
◇全国語学教育学会（JALT）…… 17
◇国際協力機構（JICA 筑波）…… 18
◇日本国際協力センター（JICE）…… 19

●インターンシップ報告書（第 2 部：民間企業インターンシップ）
◇マスコミ系企業インターンシップの学びと意義　教授　村上　信夫…… 21
（テレビ局関係）
◇株式会社ジェイ・スポーツ…… 22
◇株式会社クリエイティブネクサス…… 23
◇株式会社やんかわ商店…… 25

（ラジオ局）
◇株式会社茨城放送…… 27
（新聞社）
◇毎日新聞水戸支局…… 28
◇産経新聞水戸支局…… 31
◇読売新聞水戸支局…… 32
（出版社）
◇株式会社木楽舎（企画販促部）…… 34
◇株式会社主婦の友社…… 35
（県内企業）
◇株式会社筑波銀行（金融）…… 38
◇水戸プラザホテル（株式会社伊勢甚本社）…… 39
◇株式会社レオパレス 21 …… 40
（県外企業）
◇株式会社ガスコイン・カンパニー…… 41

●インターンシップ報告書（第 3 部：PBL 型インターンシップ）
◇専門科目「プロジェクト演習」におけるインターンシップ
根力育成プログラム小委員会委員長　神田　大吾…… 43
◇水戸市役所…… 44
◇ Domaine MITO 株式会社 …… 54

●編集後記…… 61
・インターンシップ専門委員会
教授　井澤耕一　　教授　村上信夫　　教授　清山　玲
准教授　本山宏希
・プロジェクト実習　　准教授　神田大吾
・キャリアセンター　　小磯重隆
・インターンシップ　スタッフ…… 61

平成29（2017）年度 インターンシップを終えて

佐川　泰弘（人文社会科学部長）

2017年度も人文学部および人文社会科学研究科共通科目「インターンシップ」を無事実施することができた。当学部では2000年度に当授業を開始し、18年目の実施となる。この間、多くの企業、官公庁、団体のご協力をいただき、受入先は茨城県内外へ、年によっては海外にも広がり、履修学生も増えてきた。今年度は、派遣先により公的機関と民間企業の2つに明確化し授業を実施し、他学部生も履修可とし、合計51名が履修した。また、「プロジェクト実習」にもインターンシップの意味合いを持たせた。まずは、快く学生を受け入れていただいた関係機関各位に心より御礼を申し上げたい。

インターンシップには様々な手法や形態があり、企業側が主催するものもある。当学部で開講してきたインターンシップは、学部共通プログラムの一つ「根力育成プログラム」を構成する2年生以上向けの授業科目の一つである。2週間で2単位の「インターンシップA」と1週間で1単位の「インターンシップB」からなる。受講生は派遣期間終了後に当報告書に掲載されたレポートを作成するが、派遣先には終了時に評価書の作成もお願いしている。これにより、履修の結果身についた能力等の学習成果が幾分かでも可視化されると思われる。また、「プロジェクト実習」にもインターンシップとしての意義があるため、本報告書にレポートを含めた。

学生の就業意識も高まる中、当授業のバージョンアップ、レベルアップも求められる。茨城大学における正規授業としてのインターンシップは、当学部の本授業が先駆けであるが、これを全学的な取り組みに拡大しようという試みも行われてきた。茨城大学キャリアセンターとの協力関係を強化し、事前準備を進め、ガイダンスを実施している。

近年、大学の授業は変化を求められ、変化を遂げつつある。座学にとどまることなく、学生が社会の現場に出て行き、具体的な課題を具体的に考え、行動するタイプの授業が増えつつあるが、インターンシップはその最たるものである。インターンシップを通して、結果として、教員が通常の授業では教えることがなかなか難しい、企業や行政機関の果たしている社会的意義、組織内での社員・職員の役割分担と協力関係、コミュニケーションの重要性等が、1～2週間の体験を通じて学生の中で意識化されてくる。また、積極的に行動するということが具体的にはどういうことなのかが自ずと理解されてくる。このことが、履修生のレポートからもよくわかる。

当学部で行ってきたように一つの授業として実施する場合、派遣先の負担はもちろん、準備や事前指導を担当する教職員の負担も決して小さくない。交通費や宿泊費といった学生本人の経済的負担も生じる。しかしながら、教育効果の高い授業であるため、本年度開設した人文社会科学部においても、一人でも多くの学生が履修できるように努力を続けていきたいと考えている。

最後に、履修生の皆さんには、受入先の協力があっての授業であったことを忘れず、本授業を通して現場で見て、話して得たことを、これからの学修や人生に大いに生かしていただくよう期待している。

2018年3月

平成29（2017）年度
人文社会科学部におけるインターンシップ

井澤　耕一（人文社会科学部教授）

1．人文社会科学部におけるインターンシップ

平成12年に当時の人文学科によって始められたインターンシップは、平成19年度から、インターンシップ「水戸近郊」とインターンシップ「広域」の2つに分かれて実施されていた。しかしなら「広域」と称しながら、インターンシップの実施場所が市内であった、逆に海外インターンシップであるにも関わらず、「水戸近郊」で担当したりなどの矛盾が生じ、インターンシップを志す学生にとって、結局どちらを選択すればよいのか一見して分かりにくい状況になっていた。

そこで私をはじめ担当教員は協議を重ね、その齟齬を解消するために、2年前から「派遣先」でグループ分けを行い、県庁や市役所などへのインターンシップを管轄する「公的機関」と、一般企業へのインターンシップを管轄する「民間企業」の2グループに分け、かつガイダンス等はなるべく共同で行うことに決定した。

ただし教務上の位置づけは、従来通り、人文社会科学部の選択科目として、8月～10月を中心に実施し、2週間（実質10日間）程度であれば、2単位を授与する「インターンシップA」、1週間（実質5日間）程度であれば、1単位を授与する「インターンシップB」であることには変更は無い。

本年度も、学部のインターンシップ委員会が中心になって実施にあたった。すなわち、公的機関は私井澤、本山先生、民間企業は村上先生、清山先生が実施の任に当たり、事務全般については学務係の清家さんが行った。

また昨年度より、本学のキャリアセンター（旧学生就職支援センター）の皆様に、主に公的機関への派遣に係る事務的手続きや全学部対象のインターンシップガイダンスを主催していただいた。多くの汗をかいていただいた皆様には、特に記して謝意を表します。

(1) インターンシップ合同ガイダンス（平成28年5月10日および17日）

毎年多数の学生が参加するのを踏まえて、合同ガイダンスを2回に分けて行った。そこでは主に以下のことを説明した：

① インターンシップの概要説明および注意点
② インターンシップ経験者による体験談
③ リクルート＆朝日学情ナビからの講話

今年度の合同ガイダンスへの参加者は、第1回目は209名以上、第2回目は241名以上に上った。

(2) 公的機関・民間企業派遣者決定ガイダンス（平成27年7月26日）

6月から7月にかけて、掲示に拠る派遣希望者を募り、キャリアセンターおよび教員による受け入れ先との調整を経て、派遣が決定した学生を集めてガイダンスを行った。今年度から、科目として本プログラムを履修する者のみに、ガイダンスおよび報告会の出席、また日誌、報告書の作成を義務付けたため（一部を除く）、出席者は昨年度の半数にとどまった。ガイダンスにおいては、派遣期間中の注意点、日誌・報告書の書式、学生同士で報告書を添削すること、後日担当者別に行われる報告会に必ず参加することなどを説明した。また昨年と同じくキャリア

センターの菊池美也子さまを招いて、インターンシップ参加に際しての留意点やマナーについてのお話を頂いた。

(4) インターンシップの実施（平成27年7月下旬～28年1月下旬）

今年度は、公的機関インターンシップではのべ14名（2年次生3名、3年次生10名、4年生1名）、民間企業インターンシップではのべ20名（2年次生7名、3年次生13名）、「プロジェクト実習」におけるインターンシップではのべ17名の2年次生が参加した（参考までに平成27年度は122名、平成26年度は93名、平成25年度は75名、平成24年度は67名が参加した）。インターンシップ終了後、学生達からはインターンシップの日誌、レポートが提出された。

(5) インターンシップ報告会

11月から1月にかけて、担当教員ごとにゼミ形式の報告会が複数回開かれ、参加学生が本報告会で自らの体験を披露した。派遣先と仕事内容の紹介、感想および反省を発表し、それに対して担当教員や参加学生から質問をするという形式で行われたが、各人のインターンシップ経験を十分理解できる大変有意義な報告会となった。発表会後、報告会参加者全員がレポート最終稿を提出した。

最後に平成27年度インターンシップにおいて改善した点及びこれから改善を要する点を記す。

① 報告書作成費について

本年度より紙媒体での報告書の発行は、受け入れ機関・企業への送付分、参加学生への贈呈分のみにして、それ以外は地域志向教育プログラムHPからダウンロードしてもらう形式に改めた。ただし資料保存の観点から、紙媒体は全廃せずに、少数での発行は維持していきたいと考えている。

② キャリアセンターとの業務のすみわけ

今年度もキャリアセンター職員の方々に業務上の負担をかけてしまったこと、感謝とともにお詫び申し上げたい。来年度に向けて、一方が過負担にならないように、事前の十分な話し合いと調整を図っていかなければならないと考えている。

今年度のインターンシップ実施に当たっては、各方面からの協力無くしては不可能であった。まず、本年度も快く学生の受入に御協力いただいた多くの公的機関および各種企業、団体の皆様に感謝を申し上げたい。さらに、学生への指導を熱心に行っていただいた先生方ならびに事務的なサポートをしていただいた学務係清家さん並びにキャリアセンターには感謝申し上げたい。また本報告書添付の顔写真は、本学部の高井美智明先生により撮影いただいた。本報告書作成に関しては予算委員会並びに学部執行部の配慮に負うところが極めて大きい。これらの内どれか一つでも欠ければインターンシップはスムーズに行われなかったにちがいない。この場をかりて改めて心から感謝する次第である。今後とも我々は歩みを止めることなくインターンシップの改良を図っていくので、皆様のさらなるご支援を茲にお願いする次第である。

（参考文献）

2016年度以前発行の『インターンシップ報告書』（茨城大学人文学部）

インターンシップ報告書
（第１部）
公的機関インターンシップ

公的機関でのインターンシップ体験を通した学び

人文社会科学部准教授　本山　宏希

茨城大学人文社会科学部では、2017年度に14名の学生を公的機関へのインターンシップに派遣しました。内訳は、県庁（茨城・栃木）に3名、各市町村役場等に7名、ハローワーク・NPO法人・独立行政法人・一般財団法人に各1名となっています。

公的機関と言っても、学生の派遣先は、産業技術課、保健福祉課、農地整備課、都市計画課、税務課・財務課、総務課、女性生活課など多岐にわたっております。それゆえ、学生が体験してきた職場体験はそれぞれかなり異なります。しかし、体験内容が異なっても学生がそこから学び得てきたことには驚くほど共通点があり、それぞれの学生がそれぞれの現場に共通する、いわば働く上でコアとなる何かを体感しそれを自身の糧としようとしていることを感じます。

インターンシップを終えたのち報告会を開催しますが、そこで最も聞かれる感想の一つが、体験前に自身が考えていた公務員の仕事のイメージと実際に公務員の方々が行っている仕事の違いに驚いたというものです。体験前に学生が考えている公務員というと、たとえば住民票を取りに行ったときに対応してくださる方々であり、市役所等でみかけたデスクワークをしている姿が公務員の代表的な仕事と無自覚的に考えています。しかし実際には、現場に出向くことも多く、そこで何かしらの作業を行ったり、関係する業者と相談し指示をだすなどといった職員の方々の姿を目の当たりにします。われわれの生活は、非常に多くの方々の仕事の上に成り立っていますが、それら生活を支えている仕事のうち目に入るのはごく一部であり、そのほとんどは普段目に入りません。インターンシップ体験により、今まで自身が見ていた生活が多くの見えていなかったものに支えられていることに気づき、それは新しい視点から生活（さまざまな事象）を見つめ直すことを促す貴重な体験であったことがうかがえます。

また、上述したように公務員の方々が多くの方とコミュニケーションをとり、連携していく場面を見ることにより、そういった能力の必要性を痛感したという報告もよく聞きます。さらに、インターンシップ体験の前にしっかりその部署・課を調べてから参加すべきであったという報告もよく聞かれます。今までの学生生活では、一方的に知識を与えられる受け身の姿勢でいることに慣れていますが、実際の職場では自身で問題点を見つけ、関連する事象を自身で調べ、さらに積極的にコミュニケーションをとる姿勢で現場に臨むことが求められるでしょう。それは大学の演習の授業やゼミでも求められていることですが、演習では指摘されてもなかなか実感を伴って理解できなかったことを、実際にその重要性を肌身で感じてきたことがうかがえます。インターンシップ体験は、大学生活とは別の角度から自主性・主体性を発揮することの重要性に気づける貴重な経験と考えられます。

多くの学生が上記のような貴重な体験をしてきたことを報告してくれますが、それは学生を受け入れてくださった職場の方々のご配慮に尽きます。日々の業務の他に学生を受け入れる準備等をしてくださっていることはもちろん、配属されてきた学生に優しく接してくださっている様子や、仕事に向かう真摯な姿勢が学生から数多く報告されます。ご多忙の中受け入れてくださった皆様方には、心から感謝しお礼を申し上げます。

現場の声の大切さ

茨城県庁　商工労働観光部産業技術課
社会科学科　3年
実　川　千　紘

1．参加の動機

私が今回この産業技術課のインターンシップに参加した理由は、中小企業や地場産業の振興のために、職員の方々がどのような業務を行っているのか、実際に目で見て確認したいと思ったからです。また、私は将来、茨城県庁に勤めたいと考えており、インターンシップに参加して、実際に働いている職員の方々の様子を近くで見ることで、行政に関する授業や資料だけではわからないことを学びたいと思ったからです。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城県商工労働観光部産業技術課には、管理・鉱政グループ、技術・情報グループ、地場産業グループの3つのグループがあります。管理･鉱政グループでは採石法･砂利採取法の施行に関することを、技術・情報グループでは製造業の技術の高度化・販路開拓支援などの中小企業の技術の向上に関することを、地場産業グループでは笠間焼や結城紬などの伝統工芸品をはじめとする地場産業の振興に関する業務を主に担っています。

私は10日間のインターンシップのなかで、それぞれのグループの業務の補助をはじめ、いばらきデザインセレクションの二次審査会の補助、県北ものづくり産業活性化協議会や真壁石材協同組合へのヒアリングの様子の見学、茨城県工業技術センターや笠間陶芸大学校、繊維工業指導所などの出先機関の見学をさせていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

この産業技術課のインターンシップでは、デザインから工業、鉱業まで非常に幅広い分野の業務を見学させていただき、毎日新しい知識をえることができました。産業技術課のなかだけでも非常に多くの事業を扱っており、一部分ですが、これらの計画を目にすることで、公務員の仕事が私の想像以上に多岐にわたるものであったということがわかりました。また、今までは、出先機関は県庁の補助的な機関で、本庁に比べてそれほど大きな役割を担っているとは思っていませんでした。しかし、今回のインターンシップで、これらの出先機関で行っている業務を紹介していただくことで、出先機関も茨城県の産業を発展させるのに非常に重要な役割を担っているということがわかりました。

今回のインターンシップで私が学んだことは、政策を立てる際に現場の声を聴くことの重要さです。公務員の仕事というと、黙々とデスクワークをこなし、現場で仕事をすることは少ないというイメージがありましたが、実際に産業技術課の仕事の様子を見学させていただいて、現場に出向くことがかなり多いということがわかりました。現場に赴くことでしかえられないさまざまな情報があり、机上だけで政策を考えるのではなく、現場の声を聴いて政策を立てることを大切にしているということが良くわかりました。

4．後輩へのアドバイス

まず、インターンシップの参加が決まった場合には、自分の受入先についての情報をHPなどで調べておいた方が良いと思います。前もって知識を蓄えておくことで、職員の方の説明が理解しやすくなります。また、調べた時に生じた疑問を質問することで、より深い知識をえることができると思います。

次に、実習中は挨拶と自己紹介をする機会がたくさんあるので、普段から意識してはきはき話すようにした方が良いと思います。産業技術課では私以外にも実習生がいましたが、私より挨拶も自己紹介もしっかりしており、第一印象もとても良かったため、やはり挨拶は重要だと思いました。

最後に、インターンシップは新しく経験することばかりで、非常に緊張すると思います。しかし、積極的に質問をして職員の方と交流を深めることで、緊張は薄れていきます。実習中はさまざまな人と話をする機会があるので、いろんな知識をえる良い機会です。職員の方々は快く丁寧に答えて下さると思うので、ぜひ積極的に質問をしてみて下さい。

実際に体験することの重要さ

栃木県庁　保健福祉部保健福祉課

社会科学科　3年

久　保　遥　香

1．参加の動機

私が栃木県庁のインターンに参加したきっかけは、将来地元の公務員になりたいと考えているが実際に公務員とはどのような仕事をしているのかについてあまりよく知らなかったのでインターンシップに参加し、業務内容や職場の雰囲気を掴みたいと思ったからです。

また、公務員の仕事をするためにはどのような力を身につけるべきかを学びたいと思ったからです。

2．派遣先の概要と業務内容

私が今回受け入れていただいた栃木県庁保健福祉部保健福祉課には、6つの担当があります。それは、保健福祉全体の企画・調整に関することを担当する企画調整担当、地域の保健や医療に関することを担当する地域保健担当、地域の福祉に関することを担当する地域福祉担当、生活保護の施行に関することを担当する生活保護担当、社会福祉法人・社会福祉施設の指導監査に関することを担当する検査指導担当、県立病院事業の管理運営に関することを担当する病院経営管理室の6つです。

私は5日間のインターンシップの中で、保健福祉部の出先機関である栃木県県北食肉衛生検査所、様々な理由から生活指導を要する児童を入所又は保護者の下から通わせて、個々に必要な指導を行い、自立支援を手伝う那須学園、栃木県県北児童相談所に行かせていただいたり、保健福祉課で行うイベントの開催準備のお手伝いをさせていただいたり、資料の整理のお手伝いをさせていただいたりしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は今回のインターンシップを通して、たくさん学んだことや思ったことがありました。

まず、施設を見学させていただいたり、資料整理などのお手伝いをさせていただいたりして、業務内容を知ることができたと同時に、栃木県という慣れ親しんだ土地で自分が想像していなかった様々な暮らしがあるという実態が一部分ではあると思いますが知ることができました。

また、公務員の仕事は一人で黙々とやるイメージがあったのですが、実際は一人で行う仕事もありますが多くが互いにで協力して仕事をしていて、職員の皆さんも優しくて、フレンドリーでとても働きやすそうだと思いました。

さらに、以前は仕事とはこうあるべきだというものはなかったのですが、今回のインターンシップで県庁の職員の方と一緒に仕事をさせていただいたり、お話させていただいたりして、やりがいを持って仕事をし、輝いている職員の方の姿から仕事をする上でやりがいや誇りを持つことは大切だと感じました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することに初めは不安を抱くと思います。私もそうでしたが、栃木県庁の職員の方々がとても温かく迎えてくださったのですぐにその不安は消えました。また、インターンシップに参加したことでたくさんの人に出会えたこと、貴重な体験ができたこと、目指す職に就いている方とお話させていただけたことなどさまざまなことを得ることが出来ました。そのため、私は興味がある仕事のインターンシップがあったらぜひ参加するべきだと思います。

最後になりますが、保健福祉課の皆様を始めとする職員の皆様にこの場を借りて心より感謝申し上げます。お忙しい中、丁寧で親切なご指導本当にありがとうございました。

知りたかった内側の世界

栃木県庁　農政部農地整備課

人文コミュニケーション学科　3年

小　池　美　穂

1．参加の動機

私が栃木県庁のインターンシップに参加した理由は、就職の選択肢の一つとして公務員を考えているものの、公務員の仕事がどういうものか知らなかったからです。特に行政職は、さまざまな課や出先機関に勤務するため、異動ごとの業務内容も大きく異なり、業務の具体的なイメージが湧きませんでした。また、茨城県で暮らし始めてからは、栃木県の話題や出来事に触れる機会も減り、県内の問題について考える機会も減っていました。

このインターンシップを通して、公務員の仕事を知り、公務員という職種が自分に合っているのか考えるとともに、栃木県に対する関心を高めようと思い参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

栃木県庁農政部には農政課、農村振興課、経済流通課、経営技術課、生産振興課、畜産振興課、農地整備課があり、農畜産物の生産力向上や、ウシやイチゴに代表される県内の農畜産品のブランドの開発やPRを行っています。そのなかで、私が配属された農政部農地整備課は、農地や水路などの整備や、それにともなう行政処分を行う課です。具体的には、田畑の区画整理や大規模化、農道や用排水路の整備を行うことで、作業効率の向上や耕作放棄地の減少による、生産効率の上昇や農家の負担軽減を図っています。

業務体験では、農政部内各課の業務内容の説明を受けたり、農業振興事務所や農業試験場などの出先機関の見学をしました。農地整備課での業務体験では、イベントで実施するクイズへの提言を行いました。事業の実施だけでなく、県民に課の業務や事業を知ってもらうために、これまでの出題例を参考に、より参加しやすい問題を考えました。また、法手続きや補助金を支給するために必要となる、データや書類の入力に誤りがないか確認する事務作業も体験しました。

他のインターンシップ参加学生と行われる共通プログラムでは、先輩職員との交流会があり、働いている方の生の声をうかがうことができ、疑問を解消することができました。また最終日には、他の課の実習生との研修報告や意見交換を行い、配属された課以外の業務についても知ることができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して、県職員の業務に対するイメージが大きく変化しました。私は正直、県職員は庁舎のなかでデスクワークをしていて、県民と関わる機会は少なく、県民にとって遠い存在だと考えていました。もちろん部署によっては、直接は県民と関わらない仕事もあると思います。しかし、私がお話をうかがったり見学をした多くの場面で、県民の理解や協力をえて、ともにより良い県を作っていこうと仕事をしており、派遣前のイメージよりも私たちに近いところで仕事をしていたことは、実際に現場で見なければ気づけなかったことだと思います。

もう一つ、インターンシップでえたものがあります。それは、日常生活で県の仕事を意識することが増え、視点が変化したことです。インターンシップ以前は田んぼに注意を向けることもなかったし、栃木県産の農産物を意識することもありませんでした。しかしそれが、「ここの田んぼは大きいし整っているから、県が関わって整備したところかな。」とか、「栃木の農産物が使われてる！これはPRに力を入れていたな。」と、県の仕事と関連して考えるようになりました。また、自分の疎かった分野の引き出しも増えたと感じます。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加する理由は、人によって異なると思います。就職試験の話題のため、職場の雰囲気が知りたかったから、周りが参加するから…。私は、仕事が自分に合うのかを確認し、公務員になる決意を固めるために参加しましたが、実際に業務の幅の広さや異動の多さを知り、決意を固めるのではなく、本当に自分に合っているのかをより考えるようになりました。インターンシップに参加することで、自分の就職後の働き方を考えるきっかけにもなるので、もし迷っているのであれば、参加してみてはいかがでしょうか。

将来を考えるきっかけ

つくば市役所　都市計画部　都市計画課

社会科学科　3年

鮏　川　大　輝

1．参加の動機

私は、かねてより将来市役所で働くことを志望しています。しかし、実際に市役所でどのような業務が行われているか、具体的なイメージを持てていませんでした。市役所のインターンシップに参加することによって、自分が想像している業務内容のイメージと実際の業務内容のギャップを埋めることができると思い、このインターンシップに参加しました。

また、3年生になり、将来を意識するようになりました。社会人の方々と一緒に働かせていただくことによって、これから社会人として働くということを意識できると思い、インターンシップに参加することに決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は、つくば市役所の都市計画部都市計画課に配属されました。2週間という短い期間ではあったが、市役所の方々のご厚意により、都市計画課だけでなく、建築指導課、総合交通政策課、公共施設跡地利用室、街並み景観係、周辺市街地振興室、市街地振興課、学園地区市街地振興室、沿線開発整備室、開発指導課の計11個の課の仕事に携われることができました。公共施設跡地利用室では、市民の方々の要望に対し、市役所職員としての適切な対応の仕方を講義形式で学び、他の課では主に現地視察を行いました。また、「まちづくり支援事業」の立案という課題を与えられました。

現地視察では、実際に市内を回り、つくば市が景観にどのような気配りをしているか、つくば市にはどのような公共交通機関があるか、学園都市と周辺市街地にはどのような環境の違いがあるかなど、市役所の方々に教えていただくのではなく、自分自身でつくば市の都市計画について、気づきや発見をさせていただく機会を与えられました。「まちづくり支援事業」の立案では、まちづくりの具体的な提案を掲げ、最終日にその提案の発表がありました。私は、廃校になる小中学校の再利用に関する発表を行いました。

また、このほかにも、Excelでの資料作りなど、社会人として必要な基本的な作業も行いました。私は、Excelが苦手なので、とてもいい経験になりました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、つくば市役所のインターンシップを行ったことによって、自分の興味にある分野に気づくことが出来ました。大学生になってから、将来は市役所の職員になって、まちづくりをしていきたいと漠然と思うようになったが、今までどのような観点からまちづくりをしていきたいかを考えたことがありませんでした。一言にまちづくりといっても、たくさんの方向性があります。私はこのインターンシップを通して、自分は景観の観点からみるまちづくりに興味があることがわかりました。自分の将来に関して、少し具体性を持つことが出来た気がします。

また、市役所で働くには、市民の気持ちを読み取ることが大切だということがわかりました。公共施設跡地利用室で、過疎地域の市民の方から、「施設の雑草が生えているから綺麗にしてほしい」、と要望が来たらどのように対応するべきかという質問を投げかけられました。私は普通に掃除すればいいだけだと思いましたが、市役所の方からこの要望には、廃れている地域を見捨てないで、という意味が込められていると教えてもらいました。市民からの要望に対して、ただ事務的に対応するのではなく、なぜその市民はそのような要望を出したのかなど、その人の本質を考える必要があります。コミュニケーション能力がとても必要になってくる仕事だと思いました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加する必要はないと言う人もいます。実際インターンシップに参加しなくても、大手企業に内定が決まる人、県庁や市役所職員になった人も多くいます。しかし、私は、インターンシップに参加してよかったと思っています。たくさん知識を得ることや、業務内容も学ぶことができますが、何より公務員試験の勉強や就職活動のモチベーションの向上につながります。実際に経験していると大きな自信にもなると思います。

最後になりますが、お忙しい中インターンシップを受け入れて下さったつくば市役所職員の皆様に心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

肌で感じた「福祉」の仕事

那珂市役所　保健福祉部社会福祉課

社会科学科　3年

菅　宮　弓里江

1．参加の動機

私は将来、公務員として働くことを志望しています。しかし、具体的にどのような仕事をしているのか漠然とした理解しかありませんでした。そこで、実際に公務員の仕事を体験して理解を深めたいと思い、今回のインターンシップへの参加を志望しました。

また、私は地域福祉論ゼミナールに所属しており、生活保護やひとり親家庭への支援に非常に興味があります。そのため、この分野に大きく関わる業務を行っている社会福祉課で実践的なことを学びたく思い、この課のインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

那珂市役所保健福祉部社会福祉課は、生活福祉グループと障がい者支援グループに分かれています。

生活福祉グループは、生活保護の決定及び実施、保護費の支給に関する業務の他に民生委員や社会福祉協議会等に関する業務を担っています。また、障がい者支援グループは、障がい者支援全般に関する業務を担っています。

私は10日間のインターンシップに参加させていただきました。業務は、生活保護申請に関する資料の作成を行った他、複数の会議に同席しその会議録の作成を行いました。その他の時間は、領収書の宛名書きやアンケートを封筒に入れる作業などを行いました。そして、2日目と最終日には外の活動にも同行し、病院で入院要否意見書の受け取りや、那珂市内の福祉に関する施設を見学させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、今回のインターンシップを通して大きく3つのことを学びました。

1つ目は、市役所内の雰囲気や業務の内容です。那珂市役所保健福祉部では業務によって細かく課が分かれており、それらが連携して業務ができるように環境が整っていました。私が10日間お世話になった社会福祉課では職員同士の情報共有が大事で、積極的にコミュニケーションを取りながら活動をしていました。また、同課では庁舎内での事務作業だけでなく訪問や調査のような外に出る業務も多くあり、現場に出て市民の現状を把握していくことの必要性が分かりました。

2つ目は、いかなる時も落ち着いて物事に対応していくことです。過度の緊張や落ち着きのなさは職員の方や市民の方への態度に現れてしまい、失礼に当たります。しかし、私は終始緊張して動きが硬かったことや、自分の知識量を越えた時に落ち着きがなくなることが多々ありました。その点について指導責任者の方からご指摘をいただき、自分が直すべき短所を自覚できました。自覚した短所を意識することで今後の生活を送る上での指針となり、改めて意義深かったです。

3つ目は、座学の授業だけでは知ることができない福祉の現場を知ることができたことです。私は生活保護やひとり親家庭への支援について興味があり、福祉に関する講義の受講や自分で調べるなどしてきました。今回のインターンシップを通して、授業だけでは知ることができない生活保護申請に関する作業や、民生委員や学習支援に関する会議など福祉の現場を肌で感じることができました。今後の研究に今回のインターンシップで得た知識を活かしていきたいと思います。

今回のインターンシップに参加して将来のイメージがより明確になったと共に、自分が今後研究していくテーマについての知識を深めることができ、とても濃密な10日間でした。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加するかを迷っている人は、思い切って参加することをお勧めします。インターンシップに参加することで社会人として働くとはどのようなことなのか、自分が希望する職種の具体的な業務内容や雰囲気を肌で感じることができ、将来の姿を想像する契機になるので、大きな意義があると思います。なので、悩んだら時間のあるうちに行動を起こしてみるといいと思います。また、公的機関のインターンシップに参加する時は「公的機関ならどこの部署でもいいかな」という姿勢をとるのではなく、どの部署で、どのようなことを学びたいのかを明確にしてからインターンシップに臨んでほしいと思います。

最後に、ご多忙の中インターンシップを受け入れてくださった那珂市役所の皆様をはじめ、社会福祉課の皆様に心より御礼申し上げます。10日間本当にありがとうございました。

公務員の仕事

那珂市役所　総務部　税務課･財政課

社会科学科　2年

友　部　志　穂

1．参加の動機

私は以前から、大学卒業後は公務員として働きたいという思いがありました。しかし、具体的な業務についてはほとんど知らず、事務的な仕事というイメージしかありませんでした。また、2年生に進級し、将来についてしっかり考えていかなくてはいけない時期に差し掛かっていました。そこで、今回のインターンシップに参加することを決意しました。このインターンシップでは、市役所の職場の雰囲気や仕事の内容について知るために参加させていただきました。

2．派遣先の概要と業務内容

那珂市役所本庁における総務部は総務課・財政課・税務課・収納課に分かれています。財政課には財政グループと契約・管財グループがあり、主に予算編成や企業との契約締結、役所全体の管理などを行っています。税務課には市民税グループと資産税グループがあり、主に、証明書の発行や税の賦課などを行っています。収納課は主に市税の徴収を行っています。

私が体験させていただいたのは、財政課の財政グループ、契約･管財グループ、税務課の市民税グループです。財政課で5日間、税務課で5日間、合わせて10日間体験させていただきました。財政グループでは、予算についての学習、庁内の各課への予算の資料配布、地方交付税が配分される額の計算とパソコンへの入力などをさせていただきました。また、ふるさと納税についての会議にも同席させていただきました。契約・管財グループでは、企業との契約や指名に使用する資料の作成や議場の見学などをさせていただきました。税務課では、市民の方々への証明書の発行や軽自動車の申告書のデータの確認、他の役所からの住民税に関する照会への回答の書類作成などをさせていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がこのインターンシップで学んだことは、3つあります。

1つ目は積極性を持つことと場の空気を読むことです。私はこのインターンシップに参加する目的として、職場の雰囲気や仕事の内容について知るということを挙げていました。しかし、職場の雰囲気は自然にわかっても、体験することのできない仕事の内容は、実際に職員の方にお聞きしなくては深く知ることはできません。それゆえに、職員の方とお話しする機会は、自らが積極的に作ることが必要であり、また、いま職員の方が、私が質問しても答えられる状況であるかを見極めることも必要になり、このインターンシップを通してその二つの力を身に着けることができたと思います。

2つ目は、奉仕の心です。税務課の窓口にいらした方が、税金の徴収方法について、あまり理解されていない様子でした。その際、市役所で行う手続きではないにもかかわらず、職員の方が丁寧に説明されている姿を拝見しました。公務員は全体の奉仕者といいます。その丁寧に対応している姿から、「市民のために働く」ということはどういうことであるかを知ることができました。

3つ目は、市役所の仕事の内容や職場の雰囲気です。以前は、事務系の仕事をされているイメージしかありませんでした。しかし、このインターンシップで、庁内でのデスクワークから、現場に出向く仕事まで、市役所の仕事は多岐に渡っているということがわかりました。予算の資料を拝見したり、証明書の発行をしたりして、実際に仕事をしなければ見たり感じたりすることができないものをインターンシップで体験することができ、とても有意義な体験になったと思います。職場にうかがって、仕事の内容や雰囲気を実際に見たり、肌で感じたりできるということがインターンシップの大きな魅力であると思います。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップでの経験は、自身の将来を決める際の大きな判断材料になります。また、自分の未熟さを知り、改善するきっかけになります。目的を持って参加することで、とても大きな価値のある経験になり、自分をさらに成長させることができます。後輩の皆さんにも、興味のあるインターンシップには、ぜひ積極的に参加してほしいと思います。

広範で柔軟な市役所の仕事

日立市役所　総務部　市民課

人文コミュニケーション学科　3年

森　　みなみ

1．参加の動機

私は、将来は公務員になって地域の人々の暮らしや活動を支える仕事をしたいと考えています。しかし、公務員の仕事を目にする機会が少なく、どのようなものなのか知りませんでした。また今までには、授業やお祭りのボランティアを通して、県や自分の出身でない市の職員、市民の方々のお話を聞く機会がありました。しかし、自分の住んでいる自治体職員の方々とはお話をする機会がありませんでした。そこで、公務員の仕事に実際に触れ仕事の一端をつかむと同時に、自分の生まれ育った市の組織の中で働く方々にお話を聞きたいと思い、インターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

日立市役所は、日立市の行政機関として、市民の日常生活に必要なものの提供・各出来事の手続きなど、市民生活に関わる幅広い業務を行っています。市民課では、窓口係で各種証明書の発行や戸籍などの手続き、管理係で予算の策定、窓口業務に関わる事務などの庶務を行っています。

期間は8月17日～30日の10日間で、携わった主な業務は、日立市役所のHPの編集、市民の方々に各申請書の書き方を案内すること、大震災で建物が被災したことを示すり災証明書の整理、婚姻届提出の際に記念撮影をするための背景ボードの製作でした。その他にも、戸籍法などに関わる書籍を改訂版ページに差し替える業務、市民課内のキャビネットの分類・職員の名前のマグネット製作、マイナンバーカードについての説明書類・婚姻届と説明書類のセット作り、郵便物の受け取り・仕分けの手伝い、各課が自分たちの仕事等を講義する市政セミナーへの参加なども経験しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップに参加する前、私が市役所に対して抱いていたイメージは、規律が厳しく融通が利かないという、いわゆる「お堅い」機関であるというものでした。また業務についても、例えば住民票など必要書類の発行といった、デスクワークを主にしているというイメージを漠然と持っていました。しかし、私の持っていたイメージとは異なる様々な面がありました。

私を受け入れてくださった市民課は、「市役所の顔」ともいえる部署であるといいます。市民の方々と直接お話しする機会も多く、その対応のしかたで市役所全体の印象を決められてしまうからです。そのため、何かを「できない」と断るのではなく、「できるための条件」を説明するようにしているとのことでした。個人情報を守るためのことなど、守らねばならないこと・守ってもらわねばならないこともありますが、前向きな提案をしてそのことに納得してもらい、それ以外の部分で快く手続きができるように工夫していることは、融通が利かないという「お堅い」イメージとは異なっており、工夫のし甲斐のある仕事であると思いました。

また、業務に関しても、市役所の業務は部署によってさまざまであり、デスクワークをしているとは限らないことがわかりました。10年で3か所ほどの部署を回り、部署が変わるとまるで転職したかのように仕事が変わるそうです。実際に、最終日に行われたインターンシップ報告会で、他のインターンシップ生から企業を回っていたり、学校で測量をしたりなどの、市民課とは内容もやり方も全く異なる業務に携わった話を聞きました。イメージしたり、普段目にしたりする市役所の仕事はほんの一部であり、幅広い内容の業務が市民生活のために行われていることを感じました。

4．後輩へのアドバイス

「笑顔で挨拶をすることが大切で、笑顔でいればなんとかなることもある」と、市民の方々の対応をする前に勇気づけていただいたことが大変印象に残っています。インターンシップでは、大学ともバイトとも異なる環境で働くことになるため緊張したり、失礼がないかなどが心配になったりするかもしれません。何から気をつけたら良いのか不安になった際には、とりあえず、笑顔で挨拶をすることをお勧めします。

また、気になったことは遠慮せずに聞くと良いと思います。おそらく、受け入れ先の方は、インターンシップ生の質問や話を、機関や企業の外にいる者の素直な捉え方や意見としても聞いています。時と場所を見計らい、勇気を出してさまざまな話をすれば思わぬ発見ができるかもしれません。

最後になりましたが、市民課の皆さま、ご指導と貴重な体験をありがとうございました。

市役所職員として働くということ

常陸太田市役所　総務部総務課

社会科学科　3年

張　替　萌　々

1．参加の動機

私が今回常陸太田市役所のインターンシップに参加した主な動機は、業務を実際に経験することで、市役所職員として働くということに対するイメージを明確化したいと考えたからです。

私は卒業後の進路として公務員、特に地元である常陸太田市の職員になることを志望しています。中学生のときに、学校行事の1つとして常陸太田市役所で職業体験をさせていただいたことがあり、憧れを抱いたことがきっかけです。その後、市役所でどのような仕事がしたいかという考えが少しずつ明確になってきましたが、一度中学生のときに体験しているとはいえ、長い年月が経過し、当時と比べて業務内容にも大きな変化が生じていると予想できます。そのような中でこのまま市役所職員を目指すことに対する不安があったため、今回のインターンシップを通して改めて市役所職員という職を見つめ直し、自身が市役所職員として働くということに対してよりはっきりとしたイメージを持ちたいと考えました。

2．派遣先の概要と業務内容

私がお世話になった常陸太田市役所総務課は、常陸太田市役所内全体の文書の管理や行政全般の業務に携わっている総務行政係と、職員の人事評価や配置といった業務に携わっている人事係の2つに分かれています。5日間のインターンシップ期間中、私は主に総務行政係の業務の補助をさせていただきました。

業務内容としては、常陸太田市役所に届いた郵便物をどの課宛てなのか判断して仕分けするという業務や、市内で起こった事件について担当の課に報告に伺うという業務、常陸太田市役所内で使用されるマニュアルをワードで作成するといった業務など、前述の通り市役所内全体の管理に携わる総務課ならではの業務が中心でした。また、私が交通に興味があるというお話をしたところ、本来は総務課が携わっている業務ではないにも関わらず、今年行われる道の駅ひたちおおたを拠点とした自動運転サービスの実証実験で使われるルートの試走を見学させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

5日間のインターンシップを通して数えきれないほどの学びがありましたが、特に印象深かったのは、市役所職員として働く際に重要になる考え方です。それは、「人とのコミュニケーションを大切にする」という考え方で、お世話になった職員の方が、「常陸太田市役所内に部活動があって多くの職員が所属している」とおっしゃっていました。それは、市役所内では自分自身が所属している課以外の職員の方と深い関わりを持つことが難しく、部活動が他の課の職員の方とコミュニケーションを取る場になっているからだそうです。総務課における業務の特性上、他の課のことを教えていただける機会が多く、インターンシップでさまざまな課について知ることができましたが、業務内容が多岐にわたり、数多くの課に分かれ、異動の多い市役所では、積極的に他の課の職員の方とコミュニケーションを取り、話を聞くことで視野を広くすることが大切なのだと感じました。

私は人と話すことは好きですが得意ではなく、今回のインターンシップでも、パートタイマーとして市役所で勤務されている3人の職員の方とご厚意で昼食を共にさせていただきましたが、うまく会話に入ることができずにいる私に気を遣って下さり話題を振っていただいたことが何度かあり、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。5日間でかなり改善されたようには思いますが、今後もコミュニケーション能力の向上を自身の課題の1つとし、取り組みたいと思います。

4．後輩へのアドバイス

私は、今回のインターンシップを通して後悔したことが1つあります。それは、2年生のうちからインターンシップに参加すればよかった、ということです。2年生のとき、インターンシップの説明会には参加していましたが、「まだ2年生だし、なりたい職業は決まっているから」という思いで参加するのをやめてしまいました。しかし今回のインターンシップから、業務内容に対する知識以外にも多くのものを得ることができ、今は2年生のときも参加しておけばよかった、という気持ちでいっぱいです。将来の進路が決まっている人も、決まっていない人も、インターンシップに参加することで必ず得られるものがあると思います。参加を迷っている人は、ぜひ思い切って挑戦してみてください。

最後になりましたが、お忙しい中インターンシップを受け入れてくださった常陸太田市役所の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

市役所で働くということを知る。

ひたちなか市役所　市民生活部女性生活課

人文コミュニケーション学科　3年

小　田　桃　子

1．参加の動機

私は以前から公務員として自分の地元の市役所で働くことを希望し、目標としています。しかし、それは漠然としたものであり、公務員の方々が実際にどのような仕事をしているのかということに関してはいまひとつ理解が出来ていませんでした。そこで今回インターンシップに参加することで職場を体験し、公務員という職業や地元で働くということを少しでも知りたい、また自分の将来の目標をより明確なものにしたいと思い、ひたちなか市役所でのインターンシップへの参加を希望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

派遣先の女性生活課は、消費生活センターと男女共同参画の2つの部門に分かれていています。消費生活センターでは市民の方々の消費に関する相談、また、悪徳商法の被害に遭わないように啓発する取り組みが行われており、男女共同参画では女性のDV被害の相談や啓発、また男女平等を目指した取り組みが行われています。
今回、私は女性生活課で計5日間、そのうち3日間は消費生活センターで、2日間は男女共同参画部門　でお世話になりました。

消費生活センターでは、市内各地にあるお年寄りの方々の為の福祉施設を訪問し、そこで悪徳商法の被害に遭わないように啓発を促す「ふれあい講座」の実施の準備や実施中のお手伝い、チラシやグッズを街中で配り消費被害の啓発を促す街頭啓発運動の準備と実施中の参加をしました。また、秋に市で行われる消費生活展に関する会議に参加させていただいたり、当日の消費生活センターでの出し物に使う飾りのアイデアを考えて実際に作成したりといった業務に携わらせていただきました。

男女共同参画部門では、行われている取り組みや現状を説明してもらいつつ、実際に相談ができ、市民の方々が共同で利用できる場である男女共同参画センターを見学させていただきました。他にも、DV被害の予防を啓発する紫のリボンの飾りを作成、秋に開催されるイベントにて景品として配るグッズのラベル貼り、市内で募集した男女共同参画に関するキャッチフレーズをパソコンに打ち込むことなどの業務に携わらせていただいたりしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私が今回のインターンシップで感じたことはまず、市役所の中にも様々な仕事があるということです。もちろんそれは当然のことですが、外側からたまに市役所を利用する程度ではどうしても「市役所＝事務職」という固定のイメージが先行してしまいがちだと思います。しかし、今回私がお世話になった女性生活課では、行われている講座やイベントの展示などを通して、いかに市民の方々に発信したいことが伝わるかを自分たちで考えていくという企画的要素が強い課であり、私の従来の公務員のイメージとはかなり違っている部分も多くとても驚きました。

また、公務員は態度が冷たいと言われがちで、私も最初は少し不安でした。しかし、そのようなことはなく、とても暖かい雰囲気で、また市民の方々ともお互いがきちんと理解し合えるよう優しく丁寧に接していました。そのような中で、同じ職場で働く人同士や公務員の場合は市民の方々との間での連携やコミュニケーションが働く上で大切であると思いました。これはどの職業でも共通して言えることだと思いました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップは、普段目にすることのない職場で実際に体験することによりその職業を知ることが出来るのはもちろん、自分にその職業が合っているのかなども知ることが出来ます。そのため大学卒業後にどのような職業に就きたいのかを考えて行く上でも、就活においても重要な判断材料になると思います。また本当にまだ何も就職について考えていない人でも、「なんとなく興味ある、気になる」程度でも「怖そう、失敗したらどうしよう」と変に先入観をもったり不安になったりしないで機会があればまずは体験してみると良いと思います。

市役所の仕事に触れて

山武市役所(千葉県)　スポーツ振興課　総務課

人文コミュニケーション学科　3年

石　橋　翔太郎

1．参加の動機

私は将来自治体で働きたいと考えており、特に出身地の市役所で働くことを目指しています。しかし市役所が実際どんな仕事をしているか、漠然としたイメージしか持っておらず、具体的な業務内容を詳しく知りませんでした。そこでインターンシップに参加し、実際の業務を体験することで、自分のイメージと現実の間にあるギャップをなくしたいと考えました。このような理由から業務が想像しやすい総務課、業務を想像しづらいスポーツ振興課の両方を体験したほうがより仕事に対する理解を深められると考え二つの課を希望し5日間のインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私が前半の3日間派遣されたのはスポーツ振興課でした。スポーツ振興課はスポーツイベントの運営やスポーツで使用される施設の管理を行っています。後半の2日間は総務課に派遣されることになりました。総務課は行政係、職員係、秘書室に分かれています。主な業務としては人事評価や福利厚生、報道機関との連絡調整などを担当している課です。

1日目は市民公園に赴き、現在進行中の陸上トラック工事について現場で働く方々と会議をし、進捗状況の確認とこれからの工事計画について話し合いました。また公園の門扉に落書きがされたとの報告があったようで警察方と今後の対処についての話し合いも行われていました。普段何気なく使っている施設が様々な業種の方々に成り立っているということを知ることができました。2日目は翌々日に行われる市民陸上大会の会場設営の準備を行いました。準備のためにいくつかの運動公園を回り大会に必要な機材をトラックにのせて運びこみました。機材が様々な場所に保管されているのにも関わらずスムーズに機材を積み込んでいたことから、備品管理が普段からしっかりなされていることを感じました。そして大会本番では市民の役員の方々と会場設営を行いました。

4日目からは前半と違い主に室内で業務を行いました。実際の作業としては職員の休暇申請書をパソコンで打ち込むというもので、単純な仕事ではありましたが量が多く骨の折れる作業でした。5日目は新人の職員の方々にインタビューを行い記事にまとめるという作業を行いました。また業務終了後に職員の方々とお話しできる機会をいただきました。そこで公務員試験や職場の環境など様々なお話を聞くことで、自分のイメージと現実の間にある仕事のギャップを埋めることができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップで学んだのは市役所の仕事には想像以上に多くの人々が関わっているということです。スポーツイベントの運営も市役所職員だけでは人員不足であり、市民役員の方々の協力がないとイベントがスムーズに進みません。また公園の落書きなどトラブル解決には警察との連携が必須になってきますし、陸上トラックの補修には工事現場の方々の協力が必要です。さらに工事現場の会議では市役所職員の方が工事の内容についても細かく指示出しをしていて就職後は専門知識を学ばないといけないということを実感しました。些細なことでも資料を作成してそれをもとにミーティングを行っており、そういった丁寧さが仕事のミスを減らすのだということも知ることができました。

4．後輩へのアドバイス

参加する前は不安もありますが、実際に参加してみるとたくさんの発見がありとても刺激的な体験ができたと思います。また実際の仕事をすることでその職業に対する見方が変わるということもあるので希望の職業があるのであればインターンシップにはぜひ参加していただきたいと思います。

またインターンシップ先ではわからないことはそのままにせずすぐに職員の方に聞いてほしいです。たとえそれが自分にとって些細なことであっても職員の方にとっては大きなミスである場合もあるからです。

最後に市役所の職員の方々は私をとても温かく迎え入れてくださり、大変有意義な時間を過ごすことができました。今回のインターンシップでは市役所業務の理解を深めることができ、市役所職員になりたいという思いがより大きくなりました。

「働く」ということ

水戸公共職業安定所(ハローワーク水戸)

人文コミュニケーション学科　2年

佐々木　恵　理

1．参加の動機

私は、まだ進路が決まっておらず、公務員か民間企業にするかも迷っていますが、さまざまな職業に興味があり、視野を広げるためにインターンシップに参加してみようと思っていました。その中で、「水戸公共職業安定所」と聞いて、どのような仕事をしているところなのか、漠然としか思い浮かべることができませんでした。そこで、水戸公共職業安定所がどのようなところなのか、どのような業務を行っているのかを自分の目で見てみようと思い、このインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

公共職業安定所は、ハローワークとも呼ばれ、厚生労働省の都道府県労働局に所属する国の行政機関です。職業相談や雇用保険の適用・給付など、働く人や、働こうとする人のためにさまざまな業務を行っています。また、求人開拓や面接会、セミナーなどの様々なイベントも行っており、雇用する側である求人者と雇用される側の求職者とをつなぐ役割も担っています。さらに、新卒応援ハローワークや、マザーズハローワークなどの付属施設では、新卒者や子供を持つ母親などに特化し、支援を行っています。

私は、さまざまな業務を体験させていただきました。具体的には、Excelでの資料作成、新設保育園での保育士募集の説明会・面接会やマザーズ応援セミナー、求人開拓への同行、求人票・求職票の作成、総合受付補助などです。また、雇用保険説明会や職員の方々とのグループディスカッション、労働局･監督署の見学も行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

さまざまな業務を体験する中で、どの業務も決して簡単ではなく、社会に出て「働く」ことの大変さ、厳しさを痛感すると同時に、多忙な業務の中、職員の皆さんが真摯に仕事と向き合う姿を見て、「働く」とはどのようなことかを実際に肌で感じ、学ぶことができました。

また、自分に足りない部分も見つけることができました。まず、パソコンスキルです。書類作成では、Excelを用いて行いましたが、操作に曖昧な部分が多くあったため、作業に時間がかかってしまいました。書類作成は、どの職業においても大切な業務の一つであると考えます。Wordだけでなく、Excelも使いこなせるようにしておくべきだと感じました。次に、意見を伝える能力です。グループディスカッションや、職員の方々との会話の中で、意見を求められることが多くありましたが、はっきりと答えられないことが何度かあり、自分の考えを十分に伝えることができませんでした。自分の意見を伝えるということは、働くうえでもとても重要なことだと考えます。何かを問われたとき、どんな時でも柔軟に対応し、自分の考えをしっかり伝えることができるように、幅広い知識を身に付け、日頃から、さまざまな事柄に対して、自分が思ったことや考えたことを頭の中で整理する、ということを意識して生活していかなければならないと感じました。

4．後輩へのアドバイス

私は進路についてまだ迷っていますが、職業安定所ということもあり、職員の皆様が、さまざまな職業や、自分の経験談をお話し下さり、とても参考になりました。進路に迷っている方でも、インターンシップに参加することでいろいろな人のお話を聞くことができ、自分のこれからの進路選択の参考になると思います。また、私は今回、実際に自分の目で見て、雰囲気を肌で感じ、働く人々の声を聞く、ということほど貴重な経験はないと感じました。インターンシップは、そのすべてを経験することができます。そして、業務を体験させていただく中で、自分に足りない部分が見えてくるため、自分を見つめ直す良い機会にもなります。参加を迷っている方や、まだ早いかなと思っている方も、一歩踏み出してみると良いと思います。

コミュミケーションの本質と言葉の壁

JALT　全国語学教育学会

人文コミュニケーション学科　4年

中　村　直　樹

1．参加の動機

私の指導教員である永井典子先生の紹介により今回のJALT Pink Shirts Internshipに参加することができました。このインターンはJALT会員の紹介により、参加することができます。将来英語教員を目指している私にとってこの学会は外国人の会員が7‐8割を占めているため、「英語をtoolとして使う仕事」ができる最高の機会でした。また、語学教育学会であるため、多くの語学教育の研究者と知り合うことができると考えました。このような日本では得がたい貴重な機会であったことから今回のインターンシップの参加を決意しました。

2．派遣先の概要と業務内容

JALT（Japan Association for Language Teaching）は日本国内外の語学教育に関する研究を発表する場として多くの外国人研究者が参加する学会です。インターン生は年に一度の国際学会の運営にPink Shirts Internとして参加し、今回はつくば国際会議場にて開催されました。私たちは、学会会場の設営補助、受付、インフォメーションスタッフ、タイムキーパー、テクニカルスタッフなど、学会運営には必要不可欠な仕事を任されました。どの仕事をしていても担当者が外国人であり、学会参加者が外国人であるため常に使用する言語は英語でした。また、会場の案内をすることや、クロークでの荷物などのやりとり、学会参加者の困っていることを解決するなど、臨機応変な対応を自ら考え行っていくことが求められる業務でもありました。会場入りの時間から解散までの時間は8：00から21：00と長時間にはなりますが、休憩は適宜確保されており、空き時間に発表を見て回ることができました。水やお弁当、スナックなどがインターンルームに置かれているため、それらを自由に食べることもできました。

3．インターンシップを通して修得したこと

このJALT Pink Shirts Internshipの最大の特徴は、外国語を用いて様々な国籍の人とコミュニケーションをとることができるということです。日本では「英語を勉強する」という考えが強いですが、「英語をコミュニケーションツールとして使う」ということを今回のインターンシップで実感しました。英語ができることはもちろん良いことですが、本質は言語を通してコミュニケーションをするということです。そして、様々な事態に臨機応変に対応する力も今回苦労しつつも会得することができたと思います。バッグや携帯をなくしてしまった方がいれば我々で協力して見つけ出し、予測できない事態も一人一人の自発的な行動により対処していくことができました。学会の後半になるとたくさんの参加者の方が“This conference never successes without Pink Shirts Interns !”と声をかけてくれました。この言葉はいかに自分たちの仕事が大切であったかを実感するとともに、英語をツールとして使うことができたという自信にもつながりました。

英語をツールとして使うということは、ただ単に英語ができるということではなく、相手への思いやりを持って接することだと思います。これは使用言語が英語でも日本語でも、何語でも変わりません。人と人とのコミュニケーションを成立させ、より良いものにするためには、「思いやりの気持ち」を持つことだとこのインターンシップを通して感じました。

4．後輩へのアドバイス

英語を使ったインターンシップは英語が話せるかどうか不安でなかなか積極的になれない方もいると思います。しかし、このようなインターンシップの本質は国際的価値観の認識と異文化コミュニケーションの体験ができるということです。言語という壁は少なからずあるということも事実ですが、それ以上に自分の殻を破る壁の方が大きいものだと思います。英語での仕事に不安があるという自分の殻をぜひ破ってみてください。一歩外の世界に出てみればそこには自分が経験したことのないような達成感や感動などが得られるのです。一度や二度の挫折であきらめないでください。新しい世界にいる新しい自分をぜひ創り上げてください。この経験はみなさんの将来に必要なスキルの糧となり、新しい自分の一面を見つけることができると思います。

国際協力の現場で学んだコミュニケーション

JICA筑波　研修業務課

人文コミュニケーション学科　2年

佐々木　康　介

1．参加の動機

今回私が、2年生という段階でインターンシップに参加したのには2つの理由があります。1つ目は、早い段階で社会に出る経験をすることで、その後の選択肢が広がると考えたからです。そして2つ目は、大学生活4年間という短い期間のうちにできる限りの様々な経験をしたいと考えたからです。その中でもJICA筑波を選択したのは、私が国際協力に関心を持ち、将来は日本だけではなく世界で活躍できる人材になりたいと考えていたからでした。また国際協力と言っても、現場ではどのような業務が行われ、どのような形で開発途上国に貢献しているのかということは、知識だけでは本当の意味で学ぶことができないと思い、実際に身を置くことで学びたいと考え、今回のインターンシップ参加を決断しました。

2．派遣先の概要と業務内容

JICAは国内に15の拠点を持ち、「信頼で世界をつなぐ」というビジョンの下、開発途上国への国際協力を行うと同時に、各国のニーズとそれぞれの拠点の特徴を照らし合わせて、研修員の受入事業を行っています。さらに、JICAについての理解を深めてもらうために市民参加協力事業にも力を入れ、自治体や民間企業、大学などと連携しています。

私が今回行った業務は主に4つあります。1つ目は、つくば市とつくば市教育委員会が主催する「ちびっ子博士」の写真撮影や受付業務の補助作業を行いました。2つ目は、研修員が宿泊する管理棟のフロント業務の補助をしました。ここでは、研修員の部屋の鍵を受け渡す業務が中心でしたが、様々な国の研修員がいるため英語の発音も多様で、数字だけでも聞き取ることが難しいことを経験しました。3つ目は、Eco-DRR（生態系を活用した防災・減災）コースのオリエンテーションを視察しました。どのように研修員が受け入れられていくかを学ぶことができました。4つ目は、ちびっ子博士と、Eco-DRRコースについてのFacebook記事の作成です。記事作成の際、いかに読み手にわかりやすく書くことができるかの必要性を学びました。さらに英語に翻訳する必要もあり、端的かつ正確な英語で書くことが求められました。担当の方にご指導いただきながらも、私が作成した記事が実際にFacebookに投稿された際には達成感を感じることができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップで私が得たことは主に3つあります。1つ目は、コミュニケーションの大切さです。今回私は5日間という短い期間でしたが、その中でもさまざまな方と関わる機会が多くありました。JICA筑波の場合、同じ課の人だけではなく農業に関係する専門家の方や、外部からのコーディネーターと呼ばれる研修員のサポートを担当する方と接することが多いと感じました。毎日顔を合わせない人とも円滑に仕事を行うためには、積極的にコミュニケーションをとることが重要だと身をもって学ぶことができました。

2つ目は、JICAの開発途上国の水準に合わせた技術提供の仕方です。それを感じた事例があります。それは実験器具が、最新のものがあるにもかかわらず、途上国でも活用できるように国情に合うものを使用していたことです。相手国の水準に合わせた国際協力の形を知ることができ、一方的ではない協力の仕方を学ぶことができました。

3つ目は、異文化交流の面白さです。宿泊施設には多くの研修員が滞在しているため、会話をする機会が多くありました。それは廊下ですれ違う際やエレベーターの中など、日本人同士では会話をしない場面ですることが多いことを感じました。初めは慣れないことも多くありましたが、些細なことでも会話をすることで、相手をよく知ることができることを学び、以前より自ら積極的に会話をするようになったと感じています。

4．後輩へのアドバイス

JICA筑波は一般的な企業と比べて比較的国際色が豊かな職場だと思います。また先にも述べたように、外部の方をはじめとするさまざまな方と密に接することが多いため、自ら積極的にコミュニケーションをとることが大切だと感じます。またJICA筑波は主に農業を専門に国際協力をしていますが、農業に詳しくなければいけないということもありません。そのため、国際協力がどのような形で行われているかを知りたい方、異文化の中に飛び込んでみたいと思う方にはJICA筑波をお勧めします。その経験が、次の選択肢を広げるきっかけになると思います。

最後に、インターンシップを受け入れてくださり、きめ細かいご指導をしていただいたJICA筑波研修業務課の皆様をはじめ、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。5日間という短い間でしたが本当にありがとうございました。

国際協力の多面性

日本国際協力センター（JICE）
人文コミュニケーション学科　3年
原　　郁　実

1．参加の動機

国際協力というものについて学んでいくうちに、私は将来そのような関係の職に就きたいと考えるようになりました。しかし、国際協力が行われている一連の流れの中で、私が見ているのはほんの一部分のように感じていました。表面だけを見てすべてを知った気になっていました。そこで、国際協力の現場業務はもとより、その裏でなされている事務作業がどのようなものであるか、何が求められているのかを多面的に知ることができる機会だと思い、この度のインターンシップに参加することを決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

JICEは、国際協力の推進を目的に1977年に設立され、国内に新宿の本部と他5ヶ所の支部、海外12ヶ国にプロジェクト事務所を持つ組織です。主な業務は、国際研修、国際交流、留学生受入支援など8つに分かれています。今回のインターンシップでは主に国際交流部の青少年交流課で青少年交流事業に関する企画・調整などの業務に携わりました。

5日間の内、4日を国際交流部で、残りの1日を留学生事業第1部の留学生事業課で業務にあたりました。国際交流部では、過去の招へいプログラムのHP作りやFacebook投稿案の作成、招へいプログラムの訪問先の情報更新、資材準備補助などを行いました。留学生事業第1部では、留学生を対象とした、異文化摩擦の発生するプロセスとそれを乗り越える技能を得るための異文化理解ワークショップの補助とその一環として短い劇、日本語研修クラスで行われた習字教室の補助などを行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

諸外国との国際交流をすることの新たな意義を見つけることができました。これまで国際交流をする目的と言えば、お互いの国の理解を深め、技術や経験を他国の課題解決に役立てていくというものであるとだけ考えていました。つまり、現在の関係性にのみ目を向けていました。しかし、このような交流で親交を深めることで現在の友好関係を良好にし、継続して未来につなげれば国同士の衝突をも未然に防ぐことができるのではないでしょうか。結果として安全保障にもつながるのではないかという点に今回気が付きました。

次に、プログラムなどの実施現場と、その前段階作業を含めた事務業務をどこか離れたものと考えていました。しかし、実際に業務にあたってみるとその考えが改まりました。当たり前のことではありますが、いきなり本番に挑み成功するプログラムというものはなく、どれだけ綿密に準備をしていくかが重要になっています。その様な事務業務は、過去のプログラム例なども鑑みて行われており、1つのプログラムはどこかの一面のみでは完成し得ない、様々な面で出来上がっている業務であることがわかりました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップの参加を考えている方は、参加する組織の情報を調べておくことや自分がどうして参加するのかの目的意識を明確にしていくことが求められます。それは、実際に訪問先での自己紹介や、何気ない会話の中でも活かされることでしょう。

更に、興味がある業種の良くも悪くも「現実」を知ることができるのがインターンシップです。その「現実」をどのように受け止めるのかは人それぞれでしょう。書籍やインターネットで調べることのできる情報には限界があります。どこか1面だけを見ているより、より多くの面からその業種を見ることをお勧めします。

そういった仕事を知るとともに、自分の将来について見つめなおすきっかけにもなることでしょう。将来について悩んでいる、若しくは、まだ悩むほど深く考えていないという方は特にインターンシップに参加をするべきだと言えます。良い刺激になるでしょう。

インターンシップ報告書（第２部）

民間企業インターンシップ

マスコミ系企業インターンシップの学びと意義

人文社会科学部教授　村上　信夫

人文学部（当時）で、マスコミ系のインターンシップを本格的にスタートさせたのは、2012年度からです。折角、国立大でほぼ唯一のメディア文化のコースがあり、全国から学生が集まりながら、マスコミ系のインターンシップは殆どありませんでした。マスコミ志望者も少数でした。

「インターンシップからマスコミ志望者を増やしたい」。当時の学部長から依頼があり、マスコミ各社に協力をお願いし拡大してきたものです。2017年、茨城県では歴史的な知事選があり、この時期、インターンシップに参加した学生はその瞬間に立ち会った興奮を報告しています。

結果、衆院解散の為、日程が合わず1社実現はできませんでしたが、全国紙4社（朝日、産経、毎日、読売）が揃ってインターンシップを引き受けて頂きました。その他、テレビ局、制作会社、出版など多くの企業が「茨城大生のために」インターンシップを実施して頂き、学部インターンシップの目玉の一つとなり、他学部の学生も応募しています。

このインターンシップを経験して、全国紙や県紙、地方紙、テレビ局に就職する学生も出てくるようになりました。

マスコミの仕事は、夢と現実、憧れと就活の現実が交差する独特のもの。夢や憧れがなければ務まりませんが、その現場は実に地道な作業の積み重ね。そして、就職活動は有名大学の学生をライバルとして、大変な就活を勝ち抜かなければならないという最難関でもあります。

学生の多くは、このインターンシップによりテレビを作る、記事を書く、雑誌を作るなどの仕事の面白さとやりがいを知ると共に、視聴者、読者のもとに届くまで、どれだけ多くの仕事が積み重ねられているのか気付きました、「伝える」プロのスキルの凄さを肌で感じた学生がいました。

また職場の先輩に就活について相談し、「本気なら、日本中のテレビ局を受ける覚悟を持て」といわれ、憧れだけでは勝てない就活のリアルを実感した学生もいます。

いずれも貴重な経験、ご助言であり、大学の授業だけでは伝えきれない大事な肝です。

マスコミ系のインターンシップでは、学生はインターンシップ日誌を毎日書き、それを派遣先の上司、そして担当教員へ提出します。日誌には日々の気付き、学びが綴られ、また忙しい中、学生を受け入れてくださった現場の皆さまの助言や気遣いが伝わってきます。短い期間でありながら、急成長した学生の姿を見ることもあります。

派遣先の拡大に伴い、インターンシップを経験しマスコミ各社へ就職する学生も増えてきました。憧れだけではなく、現実を踏まえた就職を決める機会となっています。

この冊子を手に取った2018年度インターンシップを希望する学生の皆さんは夢と憧れを持ちつつ、現場と就活のリアルをしっかり経験してください。目を見開き、プロたちの現場からしっかり学んでください。

最後に、ご多忙な中で受け入れてくださった各社の管理部門、そして現場の皆様方に感謝し、心からお礼を申し上げます。お陰様で、多くの学生が成長いたしました。

スポーツの価値を伝える という仕事

株式会社　ジェイ・スポーツ

人文コミュニケーション学科　3年

中　島　まどか

1．参加の動機

私は、スポーツ観戦が1番の趣味です。そのため、様々なスポーツを幅広く、しかも専門的に取り扱っているジェイ・スポーツの一視聴者でした。視聴者の1人として、どのようにジェイ・スポーツが実況中継、また独自の番組制作などに取り組んでいるのか非常に興味があり、インターンシップに参加したいと考えました。

現在、メディア文化コースに所属する私は、将来メディアとスポーツの2つと関わる仕事がしたいと考えており、その中でもスポーツ記者になりたいという志望があります。その夢を叶えるために、スポーツだけを専門的に取り扱うジェイ・スポーツのインターンシップに参加し、その現場を自分の目で見てみたいと思いました。

そして、昨年度ジェイ・スポーツインターンシップに参加した先輩の感想にも、背中を押されました。ジェイ・スポーツのインターンシップでは、他大学の学生と一緒に取り組む、実践的な内容がとても多いと伺っていました。参加すれば、同じような夢を目指す同級生と交流ができるというのも魅力の1つに感じました。以上3つの理由で、私はジェイ・スポーツのインターンシップ参加を志望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

ジェイ・スポーツは、日本で唯一の4チャンネルマルチ編成のスポーツテレビ局です。4チャンネルを駆使し、ライブ放送、ドキュメント、情報番組などを放送しています。ジェイ・スポーツ視聴のためにはスカパー！、ケーブルテレビなどの有料契約が必要であり、視聴者獲得のため社員の方々は有料放送だからこそ得られる情報の提供にこだわり、番組制作をしています。放送内容は、プロ野球、MLB、サッカーはプレミアリーグ、ICCなど。ラグビーは日本国内の主要試合に、海外ラグビーも中継しています。格闘技ではWWE、モータースポーツでは、SUPER　GT、WRC、世界耐久選手権（WEC）、スーパーフォーミュラなどをラインナップ。サイクルロードレース、スキー、フィギュアスケート、スキーなど中継が主となっています。

インターンシップは全7日間行われました。1日目から3日目までは、営業部やマーケティング部、制作部など様々な部署の方から、その業務内容を講義して頂きました。その中でも、VRを利用したコンテンツに対する意見交換や、プロ野球実況中継現場の見学をさせていただきました。4日目には西武球場に赴き、プロ野球実況中継の球場見学をしました。見学後は各々試合見学をさせていただきました。5日目から7日目はアウトプット中心のプログラムでした。5日目にはジェイ・スポーツのCMをグループで制作し、6日目、7日目は「ジェイ・スポーツの欠点」というテーマでプレゼンを作り、発表しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回、ジェイ・スポーツのインターンシップに参加して一番感じたことは、社員のみなさんのスポーツに対する愛の大きさです。有料チャンネルは登録してもらうことがまず1つの壁となります。その壁を乗り越えるコンテンツを作るためには、お金を払ってでも見たい、見る価値のある情報を提供することが必要となります。スポーツ番組は民放放送でも溢れており、またアプリなどでも視聴が出来るようになっているため、顧客の取り合い状態になっています。その中で、ジェイ・スポーツがいい！と視聴者に思わせるためには、視聴者以上にそのスポーツを知り、スポーツファンだからこそ求める情報を提供する必要があります。そういった背景からか、社員の方々が担当されるスポーツに全力で愛を注いでいることが伝わってきました。伝える、という立場になることは、それだけ知識を持つこと、そしてその仕事を楽しむことが重要なのだと学びました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップの内容は各企業によって大きく異なります。ジェイ・スポーツのようにインターンシップ生のためだけにプログラムが組まれている企業もあれば、社員やアルバイトと同じように業務に直接取り組むこともあります。自分がインターンシップから何を学びたいのか、どんなことに取り組みたいのか、頭の中でイメージした上で、こうしたインターンシップ報告書などを読み、参加を決めていただければと思います。大学2年生、3年生の夏休みは長いようでとても短いです。限られた時間の中で、自分が本当にしたいと思うことに時間を費やせるよう、下調べをしてほしいです。

1から10までの経験

株式会社　クリエイティブネクサス
人文コミュニケーション学科　3年
大　川　美　波

1．参加の動機

私は小学生の頃から、将来はテレビ番組の制作に関わりたいと思っていました。しかし、テレビ番組にどういう形で携わりたいかというのは、あまり明確ではありませんでした。そこで、制作会社に存在する様々な役職を詳しく知りたいと思い、今回制作会社でのインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私はNHK Eテレで放送中の『Rの法則』という番組を担当しました。その中でも、9月11日に生放送をする「謎解きミステリー第11弾」を制作しているディレクターの下で働きました。

Rの法則は基本的に、女子高校生への街頭インタビューからテーマを見つけ、様々な情報を調べ、解説していくという番組です。しかし、今回担当した「謎解きミステリー」はそれらとは全く違います。東京大学の学生が考えた謎を番組出演者と視聴者が解いていく企画です。そのため、まずは再現ドラマを撮影しました。再現ドラマを撮影するロケの準備として、私は小道具を作成したり、ロケスケジュールというロケ全体の予定表を作成したりしました。ロケ当日は、出演者への説明や小道具の設置、着替え補助など、ディレクターのサポートをしました。ロケが終わると、次は編集をします。今回はディレクターが編集するのではなく、NHK局内で専門の編集マンが編集をしてくださいました。そのため、編集時は簡単な書類を作成したり、編集の様子を見学したりしていました。そして生放送当日。朝から打ち合わせやナレーション録り、テロップ打ちを行いました。そしてお昼過ぎから実際にスタジオでリハーサルをしました。生放送本番では、一番早く謎解きに正解した視聴者の方の名前を、副調整室から受け取り、フリップに書いてフロアディレクターへ渡すという仕事をしました。スタジオと副調整室の間を何度も走り、無事生放送を終えました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は1ヶ月間ディレクターのそばで仕事をしたことで、先を予測することと計画的に動くことの重要性を学びました。先を予測することとは、ADとしてディレクターを支えるために必要なことです。ADはもちろん、ディレクターはとにかく忙しいです。そんなディレクターがスムーズに作業を進めるためには、ADが次は何が必要か、次自分は何をすべきかを考え、自発的に行動することが大切でした。そして、計画性も非常に大切でした。ADは1人1番組を担当しているわけではなく、同時に2，3番組を担当しています。そのため、どの番組のことも並行して進めなければならなく、頭がいっぱいになってしまいます。そこで、自分がやるべきことに優先順位をつけ、効率よく計画的に仕事を進めていくことで番組を両立させることができていました。また、ADは非常に忙しいため、期日までに仕事が終わらないこともあるそうです。その際は、1人で抱え込まず、ディレクターに事情をきちんと説明し、代替案を提案するということも重要だとおっしゃっていました。仕事は絶対にストップさせてはいけない、なにがなんでも期日までには終わらせることが大切だと学びました。

4．後輩へのアドバイス

私は最初、2週間程度の制作会社でのインターンに参加しようとしていました。しかし、1ヶ月間のインターンを割り当てられ、最初は参加するかかなり悩みました。しかし参加した今、1ヶ月間やってよかったなと感じています。1ヶ月間で、番組の企画を練るところからロケ、編集、そして生放送本番まで、一連の流れを全て見ることができました。2週間では、この過程の一部分しか見ることができないと思います。全て自分の目で見たからこそ、本当にこの業界に向いているか、思ったよりも厳しそうで途中で嫌になってしまいそうなのか、それとも、充実した仕事をすることができたのかが見極められます。期間が大切というわけではありませんが、やはり少しの時間でも自分の目でその業界、仕事をきちんと見ることが非常に大切です。インターンに参加するか迷っている方は、今のうちに色々な企業へ行き、自分の目で確かめるべきだと思います。

番組をつくるということ

株式会社　クリエイティブネクサス
人文コミュニケーション学科　2年
堀　　朋　恵

1．参加の動機

私は、将来メディア関係の仕事に就きたいと考えています。そのきっかけは、高校在学時に所属していた放送部での経験にあります。部活動での番組制作を通して、皆で一つのものをつくる楽しさや大変さを知りました。そして、番組を作る仕事に就くことができたらと考えるようになりました。

しかし、番組の制作をイメージすることはとても難しいことでした。普段見ている番組は、既に完成しているものであるからです。本当に自分のやりたいことなのか、自分にあっているのかを知るためには、実際に体験をして、知ることが必要であると思いました。そのため、今回のインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

株式会社クリエイティブネクサスは、「Rの法則」「グレーテルのかまど」そして、「所さんの目がテン！」など、主に、NHKや日本テレビの番組を制作する番組制作会社です。私は、その中でも月1回、NHKのBS1で放送されている「東京オリパラ団」を担当させていただきました。この番組は2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて活躍する選手や支える人たちに注目した情報バラエティー番組です。

期間は約1か月、実働15日間でした。初日に、番組を視聴し、会社の概要や機材のおおまかな使い方について説明していただきました。その後、前半は、主に映像をデータ化するデジタイズ作業や、番組で使用・参考にするために用いられる過去の映像の発注、企画のリサーチ作業を行いました。徐々に、これらの作業に加えて、ロケやスタジオ収録にも同行させていただきました。ロケでは、カメラや三脚などの機材を運ぶことや、買い出し、カメラマンの方の補助を体験しました。スタジオ収録では、出演者の方の控室を整え、実際に撮影の様子を見学させていただきました。また、番組の打ち合わせ、試写、編集作業にも参加・見学させていただき、一つの番組の制作過程を一通り見ることができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

本インターンシップを通して、自分が何をするべきかを考えることが大切であることを学びました。限られた時間の中で、いま、自分がやるべきことは何かを考えて動くことが、業務を的確に行うために必要なことであると感じました。

映像をデータ化するデジタイズ作業や、過去の番組を発注する作業など、複数の作業を並行して行わなければならないことがありました。その時に、どの作業から始めればよいのか、どの順番で行うのかなど、いま、するべきことを考えることが物事を円滑にすすめるために大切なことだと学びました。

また、一つの番組の裏には、多くのスタッフの方の存在があるということも学びました。普段、番組を見ているだけでは、気づくことができなかったことだと思います。そのような大勢の人が関わっているなかで番組制作をすすめることができるのは、それぞれの方が役割を持ち、自分のやるべきことを理解して動いているからだと感じました。

インターンシップ期間の15日間、さまざまなことを教えていただき、そのどれもが、とても貴重な経験となりました。実際に体験したからこその「学び」を大切に、自分の将来について考え、生かしていきたいと思います。

4．後輩へのアドバイス

積極的に「学ぶ」という姿勢を大切にしてほしいと思います。特に、質問をするということを心がけてください。インターンシップは実際に働いている方にお聞きできる貴重な機会です。少しでも疑問を感じたら、あれこれと考える前に質問をしてみてください。そして、わかったことをメモに残してください。そのメモは、インターンシップ期間中はもちろんのこと、終わった後も自分の学んだことの振り返りに役立ちます。

私は、多くのことを学ぶことができ、インターンシップに参加して本当に良かったと思っています。是非、みなさんもインターンシップに参加して、将来への一歩を踏み出してみてください。

相手を考えるということ

株式会社　やんかわ商店

社会科学科　2年

塩　畑　見　咲

1．参加の動機

私は小さい頃よりテレビが好きであり、それと共に人々の笑顔が好きでした。この2つが私の大切な基盤となっており、将来はテレビ業界で働きたいという思いへとつながりました。そのような思いからインターンシップでは必ずテレビ業界へうかがいたいと以前より思っておりました。そんな中、やんかわ商店様という“笑顔”を重要視されている映像制作会社に出会い、ぜひともうかがいたいと思い、インターンシップに参加致しました。

2．業務内容

私は9月19日（火）～9月29日（金）の期間中、2日の休みを挟み計9日間インターンシップにうかがいました。業務内容は、大きく分けて2つに分けることができます。

一方はテレビ番組関連の業務です。番組当日の業務としては、台本の印刷、セットの組み立て、楽屋の準備、番組で使用する資料作成などを行い、また実際の生放送の現場に立ち会わせていただきました。当日以外の業務としては、ナレーション撮り、音響効果、編集の見学、完成したテレビ番組の納品の同行などを行いました。また、ケータリングの買い出しや準備、収録の際に必要なもののセットなども行いました。

もう一方は、映像制作課題の作成業務です。インターンシップ中の課題として5分程の映像制作があり、そのために自らビデオを回して映像を撮り、カット割りやテロップ付け、ナレーション撮りやBGM選択などの編集作業を行いました。

集合時間や解散時間に関しては、基本的に10時集合、18時解散でした。しかし時には変動もあり、集合時間が遅い場合だと13時や17時、解散時間が早い場合だと16時半、遅い場合だと日をまたぐときもありました。このような時間の使い方は、収録等によって動きが変わるテレビ業界ならではであると思います。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、物事を自分の尺度のみで測るのではなく、相手の尺度も考えて測ることがいかに大切であるかを学びました。このことに関しては、2つの観点があります。

1点目は、やんかわ商店の皆様の常に相手のことを考え、先を見据えた上で行動をなさっている姿を目の当たりにしたことです。例として楽屋に準備するケータリングを挙げると、そのケータリングを誰が食べるのか、どのようにしたら持ってかえりやすくなるのか、など様々なことを視野に入れて準備なさっていました。その他にも誰かとお話をする際、どの言葉を取っても丁寧で何事に関しても気遣いをなさっていた姿が非常に印象に残りました。その言動を裏付けるようにインターンシップを担当してくださった方が、テレビ業界では人と人とのつながりが大切であると日頃よりおっしゃっており、多くの人々が関わり一つの番組を作っていくというテレビ業界においてつながりの大切さを改めて感じました。

2点目は、自分で映像を制作する上で自分は見る側のことをいかに考えられていなかったかを知ったことです。映像が同じ方向の動きばかりだと見る側は酔ってしまったり、目が疲れてしまったりするなど、ご指摘を頂くまでは気づくことができなかったことがたくさんありました。自分では相手のことを考えていたつもりでも、それはまだ自分の尺度のみで相手のことを考えてしまっている可能性があるということを痛感しました。また実際に映像を制作したことにより、テレビ業界の方々はいかにこだわっているかを知り、だから私たちが見ているテレビは面白いのだということに気づきました。

4．後輩へのアドバイス

今回のインターンシップを通して、私は多くのことを経験させていただき、また多くのことを学びました。これらは私に取って非常に価値ある財産です。最初のうちは、2年という学年やインターンシップという響きから不安を募らせていた私ですが、今となっては参加して本当に良かったと思っています。みなさんの勇気が今後の人生の糧となるはずです。一歩踏み出してみてください。

制作現場で見えたもの

株式会社　やんかわ商店

人文コミュニケーション学科　3年

渡　辺　瑞　樹

1．参加の動機

私は、幼い頃からテレビ番組、特にバラエティ番組が大好きでした。茨城大学に進学したのも、テレビ業界に就職するためにメディアについて学びたかったからです。そして大学3年生になり、テレビ番組の制作会社であるやんかわ商店様のもとでインターンシップをさせていただける機会をいただき、これを逃す手はないと思い参加させていただきました。

2．派遣先の概要と業務内容

やんかわ商店は、主にテレビ番組の制作および制作協力を始めとして、ミュージックビデオ、CM、商品紹介などの映像制作会社です。現在制作されている番組は、TBS系列「所さんのニッポンの出番」、フジテレビ系列「関ジャニ∞クロニクル」、「IPPONグランプリ」、テレビ東京系列「イチゲンさん」、KawaiianTV系列「おかま―ちゅんチャンネル」、「えりぬきアイドルがその場で調べるニュースの結論（略して）バラ売り」などです。また、YNN、ニコ生、CMなどにおいても、様々な映像制作を行っています。

約2週間のインターンシップ期間中にさせていただいたことは大きく分けて2つあります。1つは映像課題への取り組みです。それは、会社のある東京メトロ日比谷線広尾駅周辺の魅力を5分の映像作品にするというものでした。インターンシップ期間中に少しずつ作業の時間をいただき、企画書と台本の制作、ロケハンと取材、撮影、編集とナレーション撮りと実際の映像制作の工程を体験させていただきました。最終日には「納品」として社長に見ていただき、アドバイスもいただきました。2つ目は実際の番組収録までのプロセスの体験でした。番組収録のための企画会議や演者の方との収録前の打ち合わせの見学、セットの建て込みやフリップなどの小道具の準備、演者の方の出迎えと楽屋の準備、番組収録にも立ち会わせていただきました。ほかにも、小道具の買い出しや領収書管理など、番組を作るうえで必要不可欠な雑務も経験させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

まず映像課題への取り組みの中で映像制作について学ぶことができました。編集ソフトの使い方という実際の技術だけでなく、「どうすれば広尾駅の魅力を伝えることが出来るのか」といった、映像を見る視聴者の方の気持ちになって制作することの重要性を学びました。最終的に社長に観ていただき、映像を作り、人に見てもらい評価をしてもらうという経験ができたことは、将来テレビ番組の制作に携わりたいと考えている自分にとっては本当に貴重なものでした。

また番組収録のためのプロセスの体験では、番組制作にはたくさんの人が関わっていること、そして気持ち良く仕事をしていただくにはどうすればよいのかと演者さんの立場になって考えることの重要性を学びました。これは実際の番組収録とそのプロセスを体験させていただかなくてはわからないことであったと思います。また、ロケ番組のロケ地の仕込みの会議に参加させていただいた時に、ロケでお世話になる方への心配りを目の当たりにし、人とのかかわりを大事にすることがいかに大事であるかということを学びました。これは、テレビ業界だけではなく、社会人になり、どの業界に就職したとしても重要になってくることであると思います。このことからも、テレビ番組にいかにたくさんの方が関わっており、その方々のおかげで番組を作ることができているという事がわかりました。

4．後輩へのアドバイス

もしインターンシップに参加することに対して何らかの不安があり迷っている人がいるなら、絶対に参加するべきだと思います。自分の志す業界に実際に足を踏み入れるという経験は、必ず将来の職業選択に活きてくると思います。もちろん体験という形であれ、社会に出るという事は緊張もしますし、不安に感じることもあるとは思いますが、最終的には参加してよかったという想いが上回ると思います。自分が実際そうでした。どのようなインターンシップ先に行っても得られるものは必ずあると思うので、まずは飛び込んでみることをお勧めします。

「準備」の重要性

株式会社　茨城放送

教育学部情報文化課程　3年

小　平　絢　子

1．参加の動機

私は小学生の頃から放送業界に関わるような職に就きたいと考えており、放送局のインターンシップに参加することで実際の現場をこの目で見たいと思っていました。また、地方局がどのようにして番組を放送しているのか興味があったことや、サークル活動で実際にラジオ番組を制作していることもあり、今回茨城放送へのインターンシップを希望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城放送は、その名の通り茨城県を放送対象地域とする県内唯一の民間放送局です。茨城の情報や話題を伝えるために、さまざまな番組を制作し放送しています。

今回10日間のインターンシップでは、番組ディレクター業務、編成業務、報道記者への同行、中継の補助業務、資料室の整理業務、特別番組のスタッフなど多岐にわたる業務を経験させていただきました。

報道記者への同行は数日あるのですが、最終日に同行した際は、インタビューから原稿の執筆まで携わることができました。その日は17時半から流すニュースを担当したのですが、思ったよりも執筆が難しく完成が時間ギリギリになってしまい、記者の大変さを痛感しました。

他にも、知事選開票日に放送された特別番組では、スタッフの一員として関わらせていただきました。業務内容は、開票中にFAXやメールで届いた資料をその都度スタジオまで届けるというものでした。当確の瞬間を放送するという歴史的な場面に立ち会い、非常に貴重な経験となりました。

3．インターンシップを通して修得したこと

毎日違う業務を担当させていただいたのですが、どの業務にも共通することは「準備」という言葉が大事なキーワードになってくるということでした。2つの業務を挙げて詳しく述べていきます。

まず、番組ディレクター業務では、「各コーナーの内容やゲスト仕込み、選曲」、「スポンサー有無の確認」、「CMの送出時間の厳守」の3つの点が要だということを学びました。民放はスポンサー無しでは成り立ちません。面白い内容の番組を制作することは、新たなスポンサーに繋がります。前倒しで準備を進めることで、細かいところまで内容を詰めることができ、より面白い番組となるのです。また、番組放送中はCMが何よりも優先されます。CMをどのコーナーで流すのか、いつ流すのか、流す前や後にパーソナリティーに何を言ってもらうのかを事前に何回も何回も確認して一切誤りがないようにしなければなりません。入念な準備や確認をしておくことで、本番では時間通りに指示を出すことにひたすら集中でき、スムーズに番組を進めることができます。

次に、報道記者への同行では、取材するにあたっていかに知識を深めておくことができるかということの重要性について学びました。今回のインターンシップはちょうど知事選の期間にあたっており、候補者の各陣営で話をうかがいました。しかし私は、選挙報道の最前線に立つという素晴らしい機会がせっかくあったのにもかかわらず、勉強不足のせいで陣営での話を自分なりに細かく噛み砕くことができませんでした。さらに、街頭インタビューにも挑戦してみましたが、話を聞きつつ次の質問を考えるのが思ったよりも難しかったです。事前知識が多ければ多いほど、うまく相手から話を聞き出すことができるということを強く感じました。今後は、時事問題について自主的に勉強していきたいと思います。

4．後輩へのアドバイス

将来就きたい仕事がある場合でも、まだ悩んでいる場合でも、実際の現場を自分の目で見て経験してみるということが何よりも大事だと思います。百聞は一見にしかずという言葉の通り、自身で経験することでしか学べないことがたくさんあります。私も参加する前は不安でしたが、終えたあとは参加して本当に良かったと思いました。インターンシップは必ず今後の自分にとってプラスになると思うので積極的に参加してみてください。

記者の本質に迫る

毎日新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

阿　部　真　子

1．参加の動機

ゼミを通したくさんの記者さんにお会いし、新聞業界のいろんなお話をおうかがいしました。そのお話をお聞きしながら、皆さん活き活きと仕事をまっとうされている印象も受けました。自分自身の将来を考えるにあたって、新聞社への就職というものを視野に入れて考えてみたいと思うようになりました。そのような気持ちを持った以上、実際に現場に入り記者の仕事を知ることが必要だと思い参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

毎日新聞社水戸支局は毎日新聞の茨城県版の地域面に掲載する記事を取材、そして執筆しています。インターンシップの期間は5日間。1日目は水戸地方裁判所に行き殺人未遂事件の裁判の傍聴と、県警記者クラブの見学。2日目は水戸市議会の定例会一般質問の傍聴。3日目は京成百貨店7階催事場で催される第19回全九州の物産展の表敬訪問に同席し、実際にその内容を紙面に載せることを想定し記事を執筆、支局長に添削していただきました。その後、県政記者クラブにて筑波大学附属病院と神栖済生会病院を映像配信システムによりつなぐ、遠隔治療サポートの記者会見に参加しました。4日目は毎日新聞社水戸支局が主催する2017年毎日杯アマチュアゴルフ選手権in茨城のお手伝いをしました。5日目は新潟中越地震の翌年長岡支局に、東日本大震災の翌年大船渡市局にいらっしゃった記者さんのお話をお聞きしました。5日間すべて出勤退社時間は異なっており、記者さんの勤務時間の幅広さを感じました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私はインターンシップに参加するまで、記者の仕事のことを固い仕事だと思っていました。政治や経済の分野に関してはもちろん、支局という場合に限っては、その地域独自の情報についても精通していないといけない、そのように考えていたのです。そんな私の考え方を変えたのは、インターンシップ3日目に県政記者クラブを案内してくださった記者さんの言葉でした。その日県政記者クラブで行われた記者会見は医療分野に関するものでした。記者さんたちからはたくさんの鋭い質問が飛び交いました。記者会見終了後に案内してくださった記者さんに「記者はあらゆる分野に精通していなければいけないのですか？」とお聞きしたところ、「その必要はなく、重要なのは専門家とのつながりをどれほど持っているか」というお答えをいただきました。分からないことや確認したいことは、専門家の方に連絡を取るとのこと。“専門家とのつながりを持つ”これは毎日新聞社水戸支局内で共通で推進されている考え方だそうです。その後の4日目、5日目のインターンシップでも、人とのつながりというものを感じる場面が多々ありました。記者の仕事のベースにある取材は人の存在ありきでしか成り立たないものです。記者は全ての分野に精通していなければならない固い仕事ではなく、人とのつながりの上に成り立つコミュニケーション豊かな仕事だと分かりました。

4．後輩へのアドバイス

私は昨年も他業種のインターンシップに参加しており、今回が大学生活2度目のインターンシップとなりました。私が常に意識していることは、尻込みせずに積極的に話すということです。インターンシップ生を受け入れてくださる企業は、インターンシップ生のために様々なプログラムを用意してくださっています。インターンシップ生からたくさんの質問が飛び交うのも想定内でしょう。せっかくの機会、ただ受け身でいるというのは非常に勿体無いと思います。多少の言葉遣いの失敗は気にせず、ですます調で話すこと、基本的な挨拶をきちんとすること、大きく明るい声を出すこと、の3つさえ揃えて能動的に臨むことをおすすめします。

新聞記者に求められるもの

毎日新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

金　野　亜　紀

1．参加の動機

かねてから将来メディア関係のお仕事をしたいと考えていた私は、メディアの基礎を学ぶことができるという新聞社のインターンシップに興味を持っていました。そこで、昨年のインターンシップ報告書から、毎日新聞水戸支局のインターンシップでは多種多様な経験ができるということを知り、このインターンシップに参加することを決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

5日間のインターンシップ期間中は、記者の方と共に様々な現場に同行させていただきました。初日は刑事裁判の傍聴と県警記者クラブの見学、2日目は水戸市議会の傍聴をしました。3日目には京成百貨店にて開催された全九州物産展の関係者の表敬訪問に同席しました。その後は県政記者クラブを見学し、記者会見にも同席させていただきました。4日目は毎日新聞水戸支局が主催するゴルフイベントに出席し、このイベントの運営をしている方にお話をうかがいました。そして、最終日は30年以上記者としてお仕事をしている方から、そのお仕事についてのお話をうかがいました。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップでは、普段は経験することのできない、本当に貴重な経験をたくさんさせていただきました。

まず、一番衝撃的だったのが、初日の殺人未遂事件の裁判員裁判の傍聴でした。この日は、被害者を証人として、証人尋問が行われていました。初めに、検察側が事件当日の状況を詳しく聞き出したところ、やはり被害者を擁護する気持ちが生まれました。しかし、弁護側による尋問が始まると、被害者は事件前に、知人であった容疑者らに暴行を加えたり、脅迫していたりしたことが判明しました。被害者側にも非があったのです。裁判では、このようにして公平中立の立場から真実を明らかにしていくことが分かったのと同時に、メディア側も、公平中立の立場から事実を報じなければならないという、とても重要なことを実感することができました。

また、県政記者クラブの見学の際には、記者会見にも同席させていただきました。この記者会見は、心臓の病気の遠隔治療に関する会見でした。ある程度の知識を持っていなければ、その内容を理解することは難しいため、記者は幅広い分野に関する教養を身につけている必要があると感じました。それだけではなく、記事を書く際には、知識のない読者が理解しやすくなるように分かりやすく伝えなければならない、というお話も記者の方からうかがいました。

そして、この5日間を通して感じたのは、新聞社のお仕事の幅の広さです。インターンシップの日程からもわかるように、ここまで取材対象が多岐に渡り、スポーツイベントの主催までしているということは、今回インターンシップに参加してみて初めて知りました。そして、その分たくさんの出会いがあるということにも気がつきました。特に印象的だったのは全九州物産展の関係者の表敬訪問の時のことです。熊本からいらっしゃった「熊本城おもてなし武将隊」のあま姫が、古語を交えながらおすすめの熊本名物をお話して下さり、その独特のキャラクターがとても素敵でした。このように、多くの素敵な出会いがあるということも、新聞社のお仕事の魅力の一つであると感じました。

4．後輩へのアドバイス

参加しようかどうか迷っているインターンシップがあれば、私はぜひ参加することを勧めます。インターンシップを終えてみて、実際に参加しなければ分からなかったことがたくさんあるということに気がつきました。このインターンシップに参加して初めて、派遣先のお仕事についても、メディア業界全体に通じる重要なことについても、学ぶことができました。また、今まで就職先として考えていなかったインターンシップに参加するということも大切なのかもしれません。それまで知らなかった仕事内容やその魅力を把握することによって、将来の選択肢が増える機会にもなるのではないでしょうか。

ぜひインターンシップという経験を、将来を考えるきっかけにして欲しいと思います。

イメージとのギャップに驚いた5日間

毎日新聞　水戸支局

社会科学科　2年

坂　本　健　太

1．参加の動機

私は今回の機会を、将来の職業選択のものさしにしたいと考え、新聞社へのインターンシップに参加させていただきました。私は将来、報道関係の仕事に就きたいと漠然と考えていましたが、特にこれと言って自分で調べることもなく過ごしていました。そんななか、たまたま新聞社へのインターンシップの案内を見つけ、せっかくの機会だしやってみるか、という軽い気持ちで参加を希望しました。

2．業務内容

このインターンシップは、5日間の日程で行われましたが、5日間とも違うプログラムを組んでくださり、密度の濃い時間を過ごすことができました。

1日目は記者の方に引率していただき、水戸地方裁判所にて裁判の見学、それから茨城県庁へ行き、記者クラブといって、県警や県庁から発表があった際にすぐ動けるよう、県庁に内設されている記者の方の詰め所を見学させていただきました。2日目は水戸市議会の定例会を傍聴し、市民の関心がどこに向いているのかを知り、3日目では、京成百貨店で開催されるイベントのPRのため水戸支局を訪問したイベント関係者への対応に同席させていただいたあと、県庁へ移動し、神栖市と筑波大附属病院とを繋ぐ遠隔治療についての記者会見を見学しました。そして4日目は毎日新聞社主催のゴルフ大会を運営する側から見学し、最終日には入社30年のベテラン記者の方に時間を割いていただき、たくさんのお話をうかがうことが出来ました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回、実際の現場に同行させていただいて、本物の記者の方にもお話をうかがったなかで、私がインターンシップの前に抱いていた記者という職業へのイメージとのギャップを感じました。イメージでは、取材のため多くの時間を外で過ごし、生活リズムも不安定で大変な職業というイメージがありましたが、実際は大きな事件が起きない限り、だいたいやることというのは決まっていて、かなり自由に仕事をしているという印象を受けました。また、仕事面だけでなく、生活のことや、キャリアデザインについても貴重なお話をうかがうことができ、自分の将来のことと地続きで考えられるようになりました。

こうして様々なお話をうかがうことができたのも、自分から積極的に質問することができたからだと思います。インターンシップ初日は、こんなことを聞いて良いのだろうか、などとしり込みしてしまうことが多く、後悔することも多々ありました。ですが、せっかくの機会を無駄にしないように、と思い切って質問をぶつけるにつれて、思いがけないお話も飛び出ることがあり、常に考えながら主体的に動くこと、事前にしっかりと準備をすることの大切さを改めて思い知りました。

4．後輩へのアドバイス

実際に自分の目で見て、足を運んで現場の雰囲気を味わえたことは、私にとって大きな財産になりました。百聞は一見に如かずというように、生で見るのと見ないのとでは全くイメージが変わってくると思うし、これほど近くで企業を見ることができる機会は少ないので、活かしてほしいです。私のような面倒臭がりでも、申し込んでしまえば行くしか無くなるので、少しでも興味がある業界、企業があるならば、ぜひインターンシップに参加してほしいと思います。

私はまだ2年生で、今回初めてインターンシップに参加させていただきましたが、本格的な就職活動が始まる前に興味のある職種に触れることができ、将来について具体的に考えるきっかけになったと思います。少し時期が早すぎるのでは？と考えたこともありましたが、2年生の立場からと3年生の立場からでは、違った視点で取り組むことができると思うので、あまり気にする必要はないと感じました。

私たちが新聞に触れる意義

産経新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　2年

阿　部　　桜

1．参加の動機

私は、将来メディア系の企業へ就職を志望しています。「仕事」ということ肌で感じ、就職活動に生かすためにこのインターンシップへ参加させていただきました。これから始まる就職活動ですが、私は仕事をするという具体的なイメージができていませんでした。インターンシップに参加することで仕事をより身近に、自分のこととして考えることができ、自分がどのような職場で働きたいかということを考えることができると思いました。また、大学に入ってからレポートを書いたり、ゼミで様々な資料をつくったりする際に、文章を書くことの難しさを感じました。文章を書くということは、将来どのような仕事になったとしても必要な技術です。新聞社では、文章を書くプロの仕事が見れると思い、新聞社へのインターンシップを希望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

1日目は、ひたちなか海浜公園へコキアのライトアップの取材へ行きました。コキアがライトアップされている写真を撮ったり、見に来ていた方々へ取材を行ったりしました。それをもとに自分で記事を書き、記者の方に添削してもらったものが新聞に掲載されました。2日目は、新聞の販売所へ取材に行きました。新聞記者の方だけではなく、販売所の方のお話も聞くことができて、新聞に関わる方のお仕事をより知ることができました。その取材をもとに「人」というテーマで記事を書き、支局長から添削していただきました。3日目と4日目は、茨城県知事候補者の演説を取材しました。大井川氏と橋本氏双方の演説を聞き比べることができました。最終日は、茨城県知事選挙の投開票日だったので、大井川氏の事務所へ行き、その様子を見学しました。大井川氏が当選したので、当選が決まった時の貴重な事務所の様子を見ることができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

記者がいて記事を集め、全体をデスクがまとめるという新聞社の仕組みを知ることができました。また、取材する際の注意事項や写真の撮り方、文章の書き方についても教えていただきました。私がインターンシップに参加させていただいたのは、茨城県知事選の真只中だったので、取材をする中で選挙について自分の考えが変わったのが、1番大きかったです。それまでは、私も多くの若者と同じように選挙への関心はあまりありませんでした。しかし、茨城新聞の記者の方にお会いした際に「このままだと老人のための日本になっちゃうよ。」と言われたのが、とても心に響きました。選挙演説の取材をしに行っても、いるのはご年配の方だけ。私と同じ世代の方は全くと言ってもいいほどいませんでした。選挙は自分たちのリーダーを決める大事なものです。それによって私たちの生活にも影響が出ます。これから日本を背負っていく私たち若者が選挙で投票しなければならないという危機感を感じました。私たちが投票しなければ、私たちのため政治、私たちがより住みやすい日本にはならないのです。このインターンシップを通して、選挙だけでなく、政治にもより関心を持つことができ、若者に選挙の重要性をもっと伝えていかなければならないと思いました。

4．後輩へのアドバイス

メディア系の企業を志望しているなら、新聞は考えていなくても、新聞社のインターンシップに行ってみるべきだと思います。どの企業に行っても、企画書など、文章を書かなければなりません。文章のプロである新聞社の記者のお仕事を間近に見られるのは、とても貴重で勉強になると思います。私も新聞社への就職は考えていませんでしたが、記者の方のお仕事を垣間見ることができたおかげで、自分の中の仕事への視野が広がりました。

インターンシップは、実際に働いている方と同じように仕事が体験できる場です。ネットで調べるだけでは分からない、生の声を聞くこともできます。どのような仕事に就くか決まっていなくても、インターンシップに参加すれば、仕事をより近くで感じられ、自分が何をしたいのか発見できるきっかけになるかもしれません。インターンシップに参加することで、就職に対する考えをさらに具体的にすることができ、自分が働く姿を明確に想像できると思います。ぜひ、積極的にインターンシップへ参加してみてください

様々な「報じる」の役割

読売新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

中　島　まどか

1．参加の動機

メディア系インターンシップをまとめている村上信夫先生は、新聞社へのインターンシップをゼミ生に対し強く勧めています。それは、記事の作り方や文章の作り方を学ぶことができるという理由と、そして1つのニュースが起き、記事になるまでを見ることができるという理由があります。将来メディアの現場で働くことを志望する自分にとって、新聞社でインターンシップをし、先生の仰るようなことを現場で学ぶことができるのはとても貴重な機会だと感じ参加したいと思いました。また、新聞社のインターンシップは数多く準備されています。私は、その中でもプログラムを重視してインターンシップ先を決めました。今回、読売新聞社でインターンシップをすることに決定した理由は、スポーツ取材と市議会見学、裁判の傍聴など5日間で様々な新聞記者の姿を見ることができそうだと感じたことからです。また、読売新聞は茨城県の中でもとても大きなシェアを占める新聞社であること、7月にゼミの取材をして頂いたことなどの理由も決定に至る理由の1つでした。

2．派遣先の概要と業務内容

読売新聞でのインターンシップは5日間に渡って行われました。1日目は読売新聞の概要を教えて頂きました。午後からは、実際に警察から送られてくる資料などを基に自分たちで記事を作る、実際に発行された記事と見比べるという作業を行いました。4日目に裁判の傍聴を行なったのですが、その裁判の元になる事件の記事も、この時見せて頂きました。2日目には茨城ロボッツの試合を取材しました。実際にゴール下で写真を撮影し、記事に使える写真を選ぶこともしました。当初の予定では試合を最後まで見る予定でした。しかし、この日に13年前の茨城大学生殺人事件の犯人に逮捕状が出されるという大事件があり、試合の取材を中断して支局に戻りました。3日目には、大洗水族館に行きました。赤ちゃんカメが生まれたというメディアリリースが水族館からあり、その取材にあたりました。午後には支局に戻りその記事の作成にあたりました。4日目は、前述したように裁判の傍聴をしました。傍聴したのは、殺人未遂事件の実行犯の裁判でした。この日は夜の内勤まで見せて頂き、記事の校閲作業や文字の確認を行いました。5日目には、水戸市議会の見学をしました。午後には全5日間のまとめを行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップで一番強く感じたことは、ニュースは地方にたくさん転がっている、ということです。茨城ロボッツの試合で初出場した選手が大活躍し逆転勝利を収めたこと、赤ちゃんカメがすくすくと育ち海に放流されること、殺人未遂事件の裏側、水戸市議会で訴えられた交通網の悪さに対する意見、どれも無視してしまえばそれまでですが、誰かが気づき、ニュースとして取り上げればそれは意義のあることにあるということを学びました。そして、自分がそうした小さな出来事に敏感に気づく記者になりたいと感じました。こうして地方に転がっているニュースは、決してその地方に限られたことではなく、全国で隠れた問題であり得るからです。1つ1つの疑問を見過ごすのではなく、きちんと向き合うことがいい記者になる一歩なのだろうと思います。

4．後輩へのアドバイス

まず、新聞社でのインターンシップには参加してほしいと思います。どこの新聞社でも、大学生に対し、とても充実したプログラムを作ってくださいます。私の友人の中では、県知事選に当選した大井川知事の現場に居合わせた人もいます。新聞社だからこそ、こうした歴史の一場面を垣間見ることが出来ます。ぜひ、参加してほしいと思います。

また、その中でもどの新聞社のインターンシップに行くかを熟慮していただきたいです。どの新聞社も、そこでしか出来ない経験を提供してくださいます。インターンシップ前に、各社プログラムの内容は提示されるはずです。それらをよく見た上で、自分が新聞社で何を見たいか、どんな経験をしたいか具体的に考えた上で参加する場所を選んでほしいと思います。

人に伝えるという仕事

読売新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

渡　辺　瑞　樹

1．参加の動機

私は将来テレビ業界への就職を考えています。メディア業界を志望するのなら、テレビ業界以外の世界も見ておかなくてはならない。そう思い新聞社、特に幼い頃から実家で購読していた読売新聞の水戸支局様のインターンシップに参加させていただくことに決めました。普段からゼミの活動の中で新聞記者の方々とお話しさせていただいく機会はあったのですが、そんな新聞記者の方々がどのようなお仕事をされているかについてはほとんど知りませんでした。人に何かを伝えるという面ではテレビ業界も新聞業界も一緒であります。特に文章で何かを伝えるということは、どの業界にいっても企画書やプレゼン資料などの作成において必要になってくるものであると思います。そう考えたことも、読売新聞水戸支局様のインターンシップに参加させていただこうと思ったきっかけです。

2．派遣先の概要と業務内容

読売新聞水戸支局は、茨城県内にある4つの支局の内の一つです。また、県内に配られる読売新聞の茨城県版の記事について取材、執筆をしています。

インターンシップ中は、まず読売新聞の会社としての情報を説明していただきました。部数や拠点数、社員数などです。その後新聞製作の流れや、一面、社会面、県版などの面の種類についてのお話を聞きました。そしてバスケットボールのB2リーグのプレシーズンマッチや、アクアワールド茨城県大洗水族館のカメ展の取材に同行させていただき、その記事を自分なりに書き、支局長に見ていただきました。また、茨城県内で発生した殺人未遂事件の裁判を傍聴し、その記事と共に過去の判決文を元にした記事も書かせていただき、同様に支局長に見ていただきました。最終日には、水戸市議会の代表質問を傍聴させていただきました。取材以外も、校閲の作業を体験させていただいたり、内勤作業を見学させていただいたりしました。どれも、普段の生活ではなかなか経験できないことばかりでした。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップでは、いくつもの記事を、実際に使われている形式の原稿用紙を使って書かせていただきました。新聞は、紙の規格が限られています。そのため各記事に割り振られた行数内で、その出来事について予備知識がない方が呼んでも分かるように、要点を抑えつつわかりやすく書くという事を常に意識して原稿を書かなければなりません。そのため、読む人の目線に立って文章を書くという意識を得ることができました。

また、殺人未遂事件の裁判では、出廷していた被告人たちが全員自分と同い年でした。一見するとごく普通の青年たちに見え、今自分が生きている世界とこのような事件とが無関係だと思っていてはならないとまず気が引き締まる思いでした。そして裁判を傍聴していく中で、今回の事件が、被害者側が加害者側に普段から金銭を要求していたり、暴力や脅迫を行っていたりしたことに端を発していることがわかりました。傍聴が終わり、その記事を書いてみる中で、どうしても被害者側にも非があったということを書きたくなってしまいました。しかし、今回のような事件では「被害者の方も悪かった」とは書くことができないということを支局長にお話していただきました。メディア、特に報道においては自分が伝えたいことと、記事に書いてはいけないことが苦しくも一致してしまう事があり、報道をする側、メディアとして人に何かを伝える側のジレンマというのを実際の経験として感じることができました。メディアの情報の送り手としてのもどかしさというのは、今回のインターンシップに参加しないと経験できないことであったと思います。

4．後輩へのアドバイス

もしインターンシップに参加することに対して何らかの不安があり迷っている人がいるなら、絶対に参加するべきだと思います。自分の志す業界に実際に足を踏み入れるという経験は、必ず将来の職業選択に活きてくると思います。もちろん緊張も不安もあるとは思いますが、最終的には参加してよかったという想いが上回ると思います。どのインターンシップ先に行っても得られるものは必ずあると思うので、まずは飛び込んでみることをお勧めします。

本が売れない時代に

株式会社　木楽舎　企画販促部

人文コミュニケーション学科　2年

足　立　　晶

1．参加の動機

一年次の後期から茨城大学の広報誌『C-mail』の製作に携わっており、実際の現場ではどのように雑誌が作られているのか勉強したいと思ったため。また、新しいフリーペーパーの製作を考えており、丁寧な取材・雑誌作りを心掛ける『ソトコト』なら他紙では学べない雑誌作りのノウハウが学べると考えたから。

2．派遣先の概要と業務内容

木楽舎は営業や書籍を製作する企画販促部、広告を担当する企画制作部、webマーケティング事業部、編集企画室があり、書籍の販売ほかソーシャル&エコロジーをテーマとした月刊誌『ソトコト』を発行しています。

今回のインターシップで私は企画販促部でお世話になりました。実習中は、書籍注文の入力作業、書籍の納品作業といった事務作業のほか、文章の校正作業、PCを使い書店に送る注文書やPOPの作成、書店回り、会議への参加、全国のリトルプレスの調査等様々な仕事を体験させていただきました。

木楽舎の方は本当にご親切で、質問をしても丁寧に答えてくれました。お昼の時間は担当の上司の方や編集者の方々と食事をご一緒させていただきました。お昼を食べながらゆっくり話せる機会があるので、初めてのインターンシップでも打ち解けることができ良かったです。

3．インターンシップを通して修得したこと

私が今回のインターンシップで新しく得た視点は「流通と売り方」です。「本が面白くても流通できなかったら伝わらない、面白い流通を考える」という上司の方の言葉に、流通について考えることは本について考えることと同じくらい大切なことに気づかされました。それと同時に配置型が一般的なフリーペーパーに流通の視点を取り入れることができれば新しい読者を増やすことができ、もっと多くの人に手に取ってもらえるのではないかと気づくことができました。

また、実際に書店を回って店のコンセプト・展示はどのようであるか、どの場所に何の本が置かれているか、書店のターゲット層はどこかを調査しました。それらは現場に足を運んでみなければ見えないリアルな情報でした。現場を十分に理解し、どの書店に自社の本を取り上げてもらうか、自社の本をどのように売ればいいかを考える。新聞社ではよく「記事は足で書け」と言いますが、出版社では「本は足で売れ」と言えるのではないかと考えました。

いまは一見すると本が売れない時代であり、本の文化は廃れていくように思えます。しかし本が売れない時代だからこそ、他の本との差別化のために流通や売り方について考える契機が生まれるのではないでしょうか。これからの出版業界ではさらなる競争が生まれ、面白い本や革新的な流通が増えていくと思います。本は今以上に面白いものになっていくと確信しました。

4．後輩へのアドバイス

私が伝えたいアドバイスは「インターシップの恥はかき捨て」だということです。私は普段から物怖じしてしまう性格で、恥ずかしがり屋で積極性も無く、物事を自分の中だけで完結させようとする癖がありました。しかし指導教員である村上信夫先生の「わかったふりをしないこと、なぜを突き詰めること、聞こえのいい言葉でまとめて思考を停止させないこと」というご指導に虚を突かれ、それからは自分の殻を破って恥ずかしさを感じても勇気を振り絞って多くの人に話しかけ、質問するよう努めました。期間の短いインターシップで、恥ずかしがっていては損です。当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、わからないことがあったらわかるまできちんと聞きましょう。質問を繰り返し、会話をしていくなかで導き出せる答えもあります。「こんな変な質問していいのだろうか」「知っていて当たり前のことだったらどうしよう」と迷っても質問してみることが大切です。インターンシップ生という貴重な立場を活用してたくさんの質問を投げかけてみてください。

人と働くということ

株式会社　主婦の友社

人文コミュニケーション学科　3年

片　野　真　琴

1．参加の動機

私は以前から出版や編集などの職業に興味があり、将来の進路としてもそのような職業に就くことを志望していました。そういったこともあって、昨年も主婦の友社のインターンシップに参加させていただいていました。昨年のインターンシップはとても学ぶことが多く、日々驚きの連続で、充実したインターンシップを送ることができました。しかし、派遣先の方々の「今回は外に出る仕事が少なくてごめんね」という言葉が気になっていました。お話をうかがうなどして、撮影など社外に出る仕事にも様々なものがあることを知りました。そういった昨年は見ることのできなかった仕事をもっと見てみたいという気持ちがあり、今年も同社のインターンシップに参加することを決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

主婦の友社は大正5年に設立された出版社であり、出版業界で初めて雑誌に年間総目次を付けたり、家計簿を生み出すなどの功績を残してきました。創業当時から刊行されていた婦人雑誌である「主婦之友」は現在休刊となっていますが、現在でも雑誌・書籍・ムックなど多岐にわたり出版しています。

私が今回派遣させていただいたのは主婦の友社の中の第一事業部というところで、雑誌「ゆうゆう」の編集部や美容健康、趣味、医学のムック本の編集部が入っています。その中でも、今回私は美容健康・医学の編集部に主にお世話になりました。

業務として行ったことは、ヘアカタログの撮影への同行、家庭向け医学書の改定作業、児童向け医学書の翻訳原稿の修正作業などを主に行いました。また、社内で行われた『本のがんこ堂』代表取締役社長の田中武社長の講演会への参加や、売り込みにいらっしゃった『こころキッチン』の阪本三穂さんのお話をうかがうなど貴重な体験をさせていただきました。今年のインターンシップでは、4日間にわたってヘアカタログの撮影に同行させていただきました。昨年同行させていただいた撮影とは大きく雰囲気が違い、撮影場所やモデルさんや美容師さんなどの関わる人たちによって撮影も大きく異なるということを感じました。また、今回はライターやカメラマンの方とお話しさせていただく機会が多く、編集者以外の出版に関わる人たちのお話も聞かせていただくことができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップで私が一番感じたことは、一冊の本を作るのにとても多くの人が関わっているということでした。それはもちろん当たり前のことで、頭ではわかっていたことでした。しかし、期間中に撮影にたくさん同行させていただいたり、家庭向け医学書の改定作業で前の版でご協力いただいた先生方のリストを作成したり、『本のがんこ堂』代表取締役社長の田中武社長という書店側からのお話を聞かせていただいたりしました。その中で、関わっている人がとても多いこと、そしてその人たちなしには本を作り、売ることができないということを身をもって感じ、学びました。

また、今回家庭向け医学書の改訂作業に関わらせていただきました。その中で、前の版でご協力いただいた先生方に送るための原稿の再掲載許可書の作成という作業をさせていただきました。手本となるひな型をもとにほぼ一からこの書類の作成をさせていただいたのですが、どういう文面にしたら相手に伝わるのか、どういう形式にしたら相手が返事をしやすいのかということを考えながら作成するようにということを言われ、こういった小さなことにも細やかな配慮がされていることを感じました。この書類についてはお褒めの言葉をいただくことができて、大変嬉しかったです。

4．後輩へのアドバイス

昨年の報告書にも書いたことですが、インターンシップでした経験が無駄になるなんてことは絶対にないと私は思っています。私自身、今回2年連続で同じ会社のインターンシップに参加するということにとても悩みました。参加する意味はあるのか、就職できるわけでもないのに2度も同じところに行くなんて意味がないんじゃないか。そういったことを考えましたし、実際に言われたりもしました。しかし同じ会社でも2度と同じ経験はありません。学ぶことはいくらでもあります。2年連続で参加したことは私にとって無駄なことではなかったと自信を持って言えます。悩んでいるなら参加した方が絶対に自分の糧になります。インターンシップという貴重な機会はぜひフル活用しましょう。

実際に目で見て知る

株式会社　主婦の友社

人文コミュニケーション学科　3年

山　口　美　結

1．参加の動機

私は昔読んでいた雑誌がきっかけで、本や雑誌を作ることに興味を持ち、出版や編集の仕事をしてみたいと思うようになりました。しかし、実際に目にしたことがない出版社でどのようなことが行われているのかという知識はあまりありませんでした。今回のインターンシップに参加したのは、自分の目で見て、出版社や業界のことをより理解したいと思ったからです。より多くのことを学ぶ時間と環境があると思い、主婦の友社を志望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

主婦の友社は創業100年を超える歴史ある出版社です。雑誌のみでなく書籍やWEB、商品の開発などさまざまな面から女性にアプローチすることで「すべての女性の幸福」を追求しています。

私が派遣されたのは、メディア・コンテンツビジネス事業部のWeb編集部「暮らしニスタ」というところでした。WEBサイト「暮らしニスタ」ではユーザーの皆さんが暮らしのアイデアを、シェアすることができます。時短家事の方法や、自分でインテリアなどを作る（DIY）方法や、料理レシピなど、ジャンルは多岐にわたります。

インターンシップ期間中は、特集を組むために関連のある投稿をサイト内から探してリスト化したり、特集の小見出しや投稿の紹介文を考えたりしました。また、クライアントの新しいWEBサイトの企画会議に参加させていただき、自分で考えた企画案を発表したり、ユーザーの方の取材に同行することもありました。

3．インターンシップを通して修得したこと

出版社においてWEBメディアは大きな役割を持っています。本や雑誌が売れないと言われているいま、出版社にとって広告収入はとても大事ですが、メディア全体を見てみると雑誌広告は伸び悩んでいるそうです。そこで重要なのが、本などの売り上げや雑誌広告以外の面からも収入を得ることです。書店からの返品がない電子書籍・雑誌や、作品の映像化や暮らしニスタのようなwebコンテンツで得る広告など、紙以外にもたくさんの選択肢があることに驚きました。出版社にとってWEBメディアは生き抜くための武器となるのです。出版業界の現実を知るとともに、紙の他にも活躍できる場が大きく広がっているということに気づかされました。

また、文章を書くときは読む相手を意識することが大切であることを実感しました。投稿をまとめた特集記事の文章の添削のとき、編集長に指摘されたのが、「投稿ページを読まなくても、この文章を読むだけで伝わるように書かないといけない」ということでした。どうしてその言葉の表現なのか、特集ページだけ見ている人にもわかってもらわなければいけません。限られた文字数のなかで、読む人に伝わる文章を書くということは思っているよりも難しかったです。

2週間を通して暮らしニスタのような編集部とユーザー（受け手・読み手も含め）が双方向で作り出すコンテンツに強いあこがれを持ちました。また一つ自分が目指したいものがわかった瞬間だったのではないかと思います。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップでは企業や業界のリアルを身近で見て、聞いて体験することができるので、外からではわからないたくさんの発見があります。自分にできることや、まだできないこと、やりたいことなど、いままで気づけなかった自分のことも見えてくるかもしれません。今年初めて参加しましたが、2年生のときにも参加しておくべきであったと思いました。経験は多いに越したことはないと思います。以前の経験が次の経験に役立つからです。業界をもっと知りたいという人はもちろん、社会で働くイメージを持ちたいという人もぜひ参加してみてほしいと思います。

編集者としての責任

株式会社　主婦の友社

人文コミュニケーション学科　2年

和　田　みのり

1．参加の動機

私が今回のインターンシップに参加したのは、雑誌の編集者になりたいという夢を持っていたからです。雑誌、特にファッション誌が好きで、月に何冊も読んでいます。私も編集者として雑誌作りに携わり、多くの人に雑誌を楽しんでもらいたいと考えるようになりました。しかし、ただ好きというだけで目指していいものなのか、また編集者という仕事はそもそもどのようなものなのかという不安がありました。仕事内容もあまり知らずに、ただ憧れているだけでは、将来適切な仕事の選択が難しいのではないかと考えました。実際に現場で働く姿を見て、生の声を聞き、「憧れ」を現実的な視点から見ることで自分の夢を見つめ直そうと思いました。

2．業務内容

私は主婦の友社の女性向けファッション誌「Ray」の編集部で2週間のインターンを行いました。主な業務内容としては、撮影スタジオでの撮影の手伝いと、編集部での編集作業の2つでした。

撮影の手伝いは、昼食や差し入れの買い出しなどから、写真のイメージをカメラマンと相談するなど、多岐に渡る仕事でした。編集者として、撮影にも妥協を許さない信念と責任を持って取り組んでいると感じました。

編集作業は、実際に次号で使われる記事を編集する作業をさせていただきました。撮影から立ち会った特集ページの見出しと、商品の紹介をするキャプションを考えました。担当の編集者さんにチェックしていただき、OKが出るまで直しをしました。実際に雑誌に使っていただけたものもたくさんありました。また、写真を選ぶ作業もしました。カメラマンさんから送られてきたデータを一枚一枚チェックし、実際にラフに当てて考えました。どの体験もとても貴重で新鮮でした。

一冊の雑誌が出来上がるまでの過程を、実際に動いて感じることができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップで修得できたこととして、まず、編集者という仕事を知ることができました。インターンシップに参加する動機にも書いたように、憧れはしてはいたもののあまり知らなかった編集者としての仕事。今回一緒にお仕事をさせていただいて、雑誌を作るという仕事を明確に理解できたように思います。

次に編集者という仕事の責任感、厳しさです。編集者も立派な情報発信者の一人です。正確な情報を届ける責任感はもちろん、多くの人のニーズに応える面白い記事を作らなければいけないという使命感もあります。中途半端な気持ちでは、満足してもらえる雑誌は作れないし、読者の心に届かないと教えていただきました。自分の仕事に責任を持ち、ストイックに取り組んでいる姿を見ることができました。

最後に、雑誌を自分で作る喜びと達成感を感じることができたことです。自分の考えた言葉や選んだ写真が実際に雑誌に掲載され、多くの読者が読んでくれている。こんなに嬉しいことはないと感じました。今まで自分の作った雑誌が書店に並ぶのを想像してきました。しかし実際に携わらせていただいて、仕事の厳しさも学び、編集者としての意識の高さも知ったうえで雑誌をみると、想像以上の喜びがありました。インターンシップで体験したからこそこの気持ちを知ることができ、よりいっそう編集者を目指したいという気持ちが強くなりました。

今まで曖昧だった編集者の仕事を知ることができ、さらに自分の考えたものが雑誌となりたくさんの人に読んでもらえる達成感ややりがいを、身をもって感じることができたインターンシップでした。

4．後輩へのアドバイス

私は今まで一人で何かに挑戦することがなく、インターンシップの参加に不安がありました。しかし終わったいま考えると全く後悔はありません。緊張して不安になる人も多いと思いますが、インターンシップで体験したことは必ず自分の強みになると思います。頑張って下さい。

2週間の期間中毎日電車で東京まで通ったのですが、体力的にきつかったです。インターンシップに参加するだけでも初めてのことがたくさんで疲れると思います。長期間の場合は知り合いの家に泊まらせてもらったり、ホテルやウィークリーマンションを利用したりするといいと思います。

地域振興に取り組む銀行の仕事に携わって

株式会社　筑波銀行

人文コミュニケーション学科　3年

酒　井　麻里奈

1．参加の動機

私は将来、生まれ育った茨城県で就職して長く働き続けることを考えています。長年お世話になった場所で仕事をするからには地域貢献につながることをしたいと前々から考えていました。株式会社筑波銀行は地域復興支援プロジェクト『あゆみ』を進める地域に寄り添う企業であり、インターンシップでその業務に携われることを聞き、参加を決めました。インターンシップを通して、地域復興のためにどのような取り組みをしていくのか学び、より魅力的な地域にするために少しでも力になりたいと思いました。さらに、株式会社筑波銀行はプラチナくるみん取得企業であり、女性が働きやすい企業であることも大変興味を持ちました。女性の働きやすい場を作ることに積極的な企業のインターンシップに参加し、実際に活躍している姿を見ることは将来の自分の働き方を考える上で非常に有益なことだと考えました。

2．派遣先の概要と業務内容

株式会社筑波銀行は、茨城県つくば市に本部を、土浦市に本店をおく茨城県の地方銀行です。2010年に関東つくば銀行と茨城銀行が合併して、現在の筑波銀行が誕生しました。茨城県を中心とした地域を基盤に、地域経済の活性化・連携強化に努めています。今回私がインターンシップに参加するきっかけになった地域復興支援プロジェクト『あゆみ』は、東日本大震災の影響で地域復興の必要性を感じ、発足されました。地域のために役立ち、信頼される銀行として活躍しています。

今回のインターンシップで私が携わった業務内容は、主に3つあります。1つ目に、座学形式で銀行業務の基礎や銀行の仕組み、株式会社筑波銀行の取り組みの特徴について学びました。投資信託について考えるグループワークを行い、資料を正確に読み取ってお客様に資産運用の最適なご提案をするにはどうしたらいいか話し合いました。2つ目に、地域振興行事の体験として北茨城市民夏まつりの運営補助をしました。銀行と地域の催し事の関わりについて学び、私も地域に根ざした仕事をしたいとより強く思うようになりました。3つ目に、大子町と筑西市の自治体や主要施設を訪問し、地方創生への取り組みを学びました。各地域と銀行が連携してまちづくりや観光振興に取り組んでいるお話を聞き、意見交換をしました。人口減少や若者の流出の問題が深刻で、いまいかに地方創生への取り組みが重要か実感しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は以前から将来、茨城県で地域貢献できるような仕事をしたいと漠然と考えていましたが、今回のインターンシップで幅広い業界の方々と関わる中で、地域貢献と一口に言っても様々な職の選択肢があることを学びました。また、各地域の現状、振興への取り組みのお話を聞いていると、まだまだ勉強不足であると痛感しました。同時に、地域に根ざした仕事により興味を持ち、私自身何ができるのか深く考えるようになりました。これから就職活動が始まりますが、自分はどうなりたいのかしっかり軸を持ちながら、幅広い視野で就職先を選択していきたいと思いました。

4．後輩へのアドバイス

自分は将来どのような仕事に就いているか、想像できている人はあまり多くないと思います。私もその一人でした。今回私が参加したインターンシップでは、銀行内の様々な部署の方や地方公務員の方ともお話する機会があり、想像していた以上に色々な働き方があることを学び、以前に比べて自分の将来像を見据えることができました。実際に社会人として業務を体験することを通して自らの視野を広げ、将来の選択肢を増やすことができると思います。現場に行き、見て聞いて感じることは、どんな自分になりたいか考えるきっかけになります。興味があるインターンシップに参加し、有意義な時間を過ごしてください。

笑顔で接することの大切さ

水戸プラザホテル(株式会社　伊勢甚)
人文コミュニケーション学科　3年
佐々木　優　夏

1．参加の動機

幼い頃から家族旅行などでホテルに泊まる機会が多く、いつも笑顔で対応してくれるホテルで働くスタッフの皆さんに憧れを抱いていました。大学生になった今でも、ホテル業界やお客様にサービスすることへの興味・関心を抱いています。そこでインターンシップを通して、実際にホテルで働くスタッフの皆さんの仕事を見学させてもらうこと、業務を体験させてもらうことで、漠然としたイメージであったホテルでの仕事について正しく知りたいと思い、インターンシップの参加を決めました。そして、将来の進路選択や業界、業種選択などの就職活動に役立てたいと考えました。

2．派遣先の概要と業務内容

5日間のインターンシップの期間中は毎日異なる部署に配属され、さまざまな業務を見学・体験させてもらいました。今回のインターンシップでは、期間や学年は違うものの、他大学の生徒も参加しており、ときに互いに助け合いながら業務に取り組むことができました。1日目は、 主に館内見学と会議、披露宴の会場づくりの業務を行いました。スタッフの皆さんの正確で迅速な仕事ぶりを目の当たりにし、華やかなイメージのホテルの裏で、多くの人たちで分担しながら、さまざまな仕事が行われていることを知ることができました。2日目は、主に披露宴でドリンクサービスを行いました。実際の会場で業務に取り組ませていただけたことで、披露宴のような限られた時間の中で定められた工程を進めていくには、一人ひとりの仕事の迅速さと効率性が求められることを肌で実感することができました。3日目は、主に和食レストランでのお茶出しのサービスやバッシングの業務を行いました。料理1つを提供するにも、たくさんの人の時間と労力が費やされていることを知ることができました。お客様が来店されて、料理が提供されるまでの一連の流れの中では、スタッフ全員の連携が重要であることが改めて分かりました。4日目は、主にハウスキーパーの業務を行った。メイドさんがつくった部屋の点検・チェックを行い、お客様に提供する客室を完成させる重要なポジションであることが分かりました。直接お客様とは対面していなくても笑顔で声をかけながら部屋に入るなど、サービスが徹底されていました。5日目は、主にドアパーソンの業務補助を行いました。ベルパーソンは、一番はじめに接触し、接触している時間も1番長いポジションであることが分かりました。業務の内容も多岐にわたり、マニュアルだけではないその場での臨機応変な対応が求められるということが感じられました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップに参加するまでは、客という立場からでしかホテルの仕事を見ることができませんでしたが、インターンシップの中でスタッフという立場からホテル全体を見学することができ、貴重な体験となりました。スタッフの皆さんが、Smile, Speed, Smartの3Sを大切にしていることで、お客様により良いサービスをお届けすることができるということを知ることができました。そしてなにより、お客様に満足していただけるサービスを提供する上で一番重要なのは、笑顔であることが改めて感じられました。笑顔で対応することで、お客様が快適に過ごせるとともに、自分たちも気分良く業務に取り組むことができ、双方にとって良いことがあることが分かりました。

4．後輩へのアドバイス

自分が少しでも興味のある業界や仕事などは、ぜひ積極的にインターンシップに参加して、実際に自分の目で見て感じてみてほしいと思います。よく言われるように、実際に働いてみてからのイメージと現実のギャップをなくすということもそうなのですが、外から見ているだけではわからない業務内容や、職場の雰囲気を感じることができるという点から見ても、インターンシップに参加することは大きな意味を持つと思います。インターンシップに参加する時期に早いということはないと思います。時間や気持ちにもまだ余裕のある早いうちから、インターンシップに参加することをおすすめします。

最後になりますが、この場をお借りして、お忙しい中インターンシップの受け入れをしてくださった水戸プラザホテルの皆様に感謝申し上げます。短い間ではありましたが大変お世話になりました。

「賃貸」の仕事を通じて お客様と向き合う

株式会社　レオパレス21

社会科学科　2年

山　邉　史　奈

1．参加の動機

私はまだ就職について現実的なイメージが持てず、漠然と不動産業や金融業、公務員といった職に就きたいと考えていました。また、私は学外でのアルバイトも未経験で、働くということはどういうことなのか具体的なイメージが持てませんでした。そこで、まずは不動産業の実際の現場に触れてみようという思いから株式会社レオパレス21のインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

株式会社レオパレス21は全国に展開する不動産会社です。主に法人向け・個人向けの賃貸事業や物件の建築および管理、リゾート事業、介護サービス事業を行っています。

今回のインターンシップは全5日間の日程でした。私がこのインターンシップで受けた研修は主に法人や個人のお客様に物件を貸し出す「賃貸部門」の研修です。5日間を通じて受入先であるレオパレスセンター水戸店の店長さん、副店長さんに指導および評価やフィードバックをしていただきました。初日はレオパレス21の事業説明を受け、接客業の基礎となるヒューマンスキルのワークショップを行いました。2日目はビジネスマナーの基礎を学び、接客で何が必要なのかを考えました。また、お客様に合ったマーケティングを行うためにはどういった戦略を立てるべきかを考えました。3日目は実際に物件の見学を行い、レオパレス21の物件の特徴やそこを借りるお客様の属性を考えました。加えて、この日から電話応対やお客様へのお茶出しなどの接客のサポートにあたりました。また翌日の4日目にかけて異業種および同業他社を私1人でお客様の立場で見学し、接客業における「良いサービス」の提供の仕方、またそれぞれのマーケティング戦略をもとにした接客の仕方の違いについて学びました。4日目と5日目にかけてこれまでの日程で学んだことを生かし、企画書を実際に作成しました。最終日はこの企画書のプレゼンテーションを受入先の店舗の店長さんに対して行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、不動産業界、特に賃貸事業に対する明確なイメージを持てるようになりました。不動産業は、お客様に大きな買い物をしてもらう仕事です。特に賃貸は、そこで借りた物件にお客様が一生住む場合もあります。そのため、お客様の要望は何なのか、また、どのような物件に住みたいか、ということをお客様とよく考え、メリットとデメリットを通じてお客様に納得していただく必要があります。私は、賃貸と聞くと建物を貸す仕事、と漠然と考えていたので、このような工夫や考えが後ろにあるとは知りませんでした。

さらに、この5日間でお客様と向き合うということはただマニュアルに従って接客を行ったり、ただ会話をしたりするだけではないということが理解できました。要点をまとめて話すこと、お客様の要望を何気ない会話の中から引きだし、具体的なニーズは何なのか考えること。また、お客様に納得したうえで契約をしてもらうためにデメリットも包み隠さず伝えることなど、「良いサービス」を提供するための心構えを修得できました。この経験は将来にも役立てることができると思います。

4．後輩へのアドバイス

実際に現場の仕事を間近で見ることは貴重な経験です。特に、接客における会話はその場でしか学ぶことができません。現場の方々の会話ひとつひとつに前述したスキルが活かされています。そのため、積極的に質問したり、耳を傾けたりすることが大切になってきます。また、自分には何ができるかを考えるとよりいっそう充実したインターンシップを送ることができます。ぜひインターンシップに参加してみてください。

人と繋がり、テレビは作られる。

株式会社　ガスコイン・カンパニー

人文コミュニケーション学科　3年

小杉山　伸　之

1．参加の動機

私は、自身の就活において、テレビ業界を目指しているため、制作会社のインターンを通して実際の現場の空気を感じ、自分の抱く理想やイメージと一致しているかを確かめたかったから。

また、「ADは大変」や「テレビ業界は労働時間が長い」など様々な事を言われているが、それを鵜呑みにするのではなく、実際に自分で体験し、判断したいと考えたから。

2．派遣先の概要と業務内容

株式会社ガスコイン・カンパニーでは、お笑いコンビ「よゐこ」の有野晋哉氏が様々なゲームに挑戦し、ゲームのエンディングを目指すコーナーをメインとする『ゲームセンターCX』という番組を自社で制作し、それに加えて関西ローカル局MBSなどの特番も手掛けている。主にゲームを軸に番組を構成し、番組制作だけでなく、ゲームショーに参加するなど幅広い活動を行っている。

派遣先では、主にアシスタントディレクターさんと行動を共にし、業務の補佐を行った。具体的には、キャプションと呼ばれる収録で演者さんが話したセリフや起こった事をすべて文字に起こすという作業を行った。その他には、過去の映像を視聴し、訪れた場所をエクセルにデータ化する作業や、ロケの準備、買い出しを行った。さらに、ロケや収録当日は現場に同行し、セッティングを行い、収録にも参加した。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、インターンシップを通して、「率先して動く」、「相手を意識して働く」ということを学んだ。インターン先では、常に仕事が与えられているわけでなく、受け身の姿勢ではいけないと強く感じた。自ら率先して、何かすべきことは無いか聞きに行くことが大切だと考えた。また、ロケや収録など全員で一つの作品を作り上げる現場では、それぞれにすべきことがあり、自分に出来ることは無いかと常に意識し、出来ることは、したほうがいいのか迷うよりも先にまず動くことが大切であると感じた。

また、インターン期間中多くの時間を費やしたキャプション作業では、キャプションを読むディレクターさんの立場になり、考え制作することが求められると学んだ。キャプションとは、ロケや収録で撮影した映像を文字に起こす作業であり、ディレクターさんは映像を見ず、この資料を読んで編集を考える。つまり、文字で読むだけで、どこで盛り上がったか、または、必ず使うところなどを判断できる必要がある。そのため、キャプション作業では、★などの記号を使用し、面白いと思った所やゲームの初プレイの場面などを強調するよう教わった。ただ文字に起こすだけでなく、これを読む相手を意識することで、よりよい資料が出来ることを体感することが出来た。

さらに、相手を意識することは、ロケや収録現場でも必要であると学んだ。先輩のアシスタントディレクターさんが困っているのを見つけたら何を必要としているかを先読みし動くと良いと感じた。

インターンを通して学んだこれらのことは、制作会社で働くために必要な事ではなく、学生生活や就職活動でも必要であることであり、これからの行動に活かして行きたい。

4．後輩へのアドバイス

迷っているなら挑戦したほうがいい。自分の未来だから、誰かが悪く言っていたからやめるというのはもったいない。

大事なことは、自分が現場に行って感じたことだと思う。私の場合は、実際に制作会社にインターンへ行き、そこで働く人々はもちろん、インターン期間中に出会ったすべての人々が輝いていて、かっこよく見え、自分もいつかはこうなりたいという目標を見つけることが出来た。実際に働く人が話してくださる言葉一つ一つが胸を打つ言葉である為、必ず自分の将来にプラスに働くと思う。ぜひ挑戦してほしい。

インターンシップ報告書（第３部）

PBL型インターンシップ

専門科目「プロジェクト実習」におけるインターンシップ

根力育成プログラム小委員会委員長　神田　大吾

専門科目「プロジェクト実習」は、学生が5名以上9名以下のチームを作り、学外協力者からご提案いただいたプロジェクト課題に、1年を通じてチーム単位で取り組むPBL（Project Based Learning）授業です。取り組む課題の内容によってプロジェクト実習A～Dの4カテゴリに区分され、この内の「D」が、通常の活動にインターンシップを組み合わせた「PBL型インターンシップ」です。

プロジェクト実習Dは、4～5月の一斉授業で学修の基礎を学ぶと共に、課題提案者と緊密に連絡を取りながらチームミーティングを重ねてプロジェクト課題の考察を深め、6～7月の具体的な活動を踏まえて、8～9月の夏休み期間中にインターンシップを行います。その後、引き続き課題への取り組みを進め、11月のピーク行事、12月半ばの年度末活動報告会（一般公開）を経て、1月に報告書をまとめて1年間の活動を締めくくります。活動の詳細は人文社会科学部地域志向教育プログラムHP（製作中）で公開されます。

「プロジェクト実習D」のインターンシップ期間は「2日間以上」としています。5～10日間を基本とする通常の短期インターンシップよりも短いですが、派遣前に約4ケ月間に亘ってプロジェクト課題に取り組み、受け入れ先ならびに提示された課題に対して十分な理解と経験を積んだ上での派遣となるため、短期間でも質の高い活動となることが期待されます。また、インターンシップ終了後も引き続き課題に取り組み、インターンシップで得た学びをその後のチーム活動にフィードバックし、さらに深い学びへとつなげることが期待されます。

2017年度は水戸市役所市長公室交通政策課とDomaineMITO株式会社に学生を派遣することになりました。

水戸市役所市長公室交通政策課からは「水戸の公共交通の未来の創造」という課題をいただき、①「市内バスで巡る水戸カフェマップ」の作製を目指す5人と、②水戸駅北口バス乗り場案内板の改善を目指す5人とに分かれて課題に取り組みました。活動経費確保のため、大学支給予算に加えて茨城県地域公共交通利用促進活動助成金に応募し、30万円の交付をいただきました。

①のチームは、既存のガイドブックに頼らず、実際にカフェを回って自分達の価値観で掲載店舗を決定。まず試行版を作って11月の茨苑祭でアンケート調査を行い、その結果を基に改善したマップを完成させました。このマップは、今後茨城大学学生はもとより一般にも広く配布していく予定です。

②のチームは、水戸駅北口で一般利用者への聞き取り調査を行い、「利用者が求める情報は何か」を考え、求められる情報に絞り込んだ案内板原案を作成しました。その後、水戸市内に路線を持つバス会社4社や茨城県バス協会との話し合いを経て改善を重ね、完成に漕ぎ着けました。

DomaineMITO株式会社からは日本ワイン、まちなかワイナリー、消費者も巻き込むという3点を軸にしたプロジェクト課題をいただき、7人が「ワインを通じて地域コミュニティを広げる」活動に取り組みました。水戸まちなかフェスティバルでのワイン販売や、秋の新酒リリースパーティ等、多彩な業務に参加させていただき、民間企業の仕事内容を深く知ることが出来ました。

いずれの活動におきましても、インターンシップ期間中はもとより、期間の前後においても受け入れ先の皆様から懇切丁寧なご指導をいただきました。お陰様でどの学生もインターンシップを通じて大きく成長し、12月の活動報告会では見違えるようなプレゼンを行いました。ご多忙な中でも快く学生を受け入れてくださった皆様方に改めて篤く御礼申し上げます。

市役所のお仕事を通じて

水戸市役所　市長公室　交通政策課

社会科学科　2年

小宮山　弥　来

1．参加の動機

私は将来、生まれてからずっと住み続けてきた、愛着のある茨城の地域の人々の生活に密接にかかわることができ、公益のために働くことができる市役所で働きたいと考えていました。加えて、市役所では具体的にどのようなお仕事をしているかについて興味がありました。

その中でも、日ごろの通学で馴染みがあり、県庁所在地である水戸市の市役所であることや、通学で水戸市のバスや駅を利用する機会が多くあり、水戸市の公共交通政策がどのようにして行われているのかについて興味をもったことから、水戸市役所の交通政策課のインターンシップに参加することによって市役所でのお仕事を実際に体験したいと考えたため参加を決めました。

また今から市役所のお仕事はどのようなものなのか知ることで、自分が市役所に就職するために必要なスキルを知っておくことが大切だと考えたことも理由の1つです。

2．派遣先の概要と業務内容

派遣先は水戸市役所の市長公室の交通政策課で、そこでは、交通政策の企画及び調整に関する業務や、高齢者・障がい者の方々の移動等の円滑化の促進に関する法律に関する業務などを行っています。

私が携わった業務は3つあります。1つ目は水戸市バリアフリー環境整備推進協議会への参加及び議事録の作成、2つ目はエクセルを用いた異なる施設間の距離の測定及びデータ化、3つ目はワードを用いた経路図の作成です。

これらの業務を派遣期間である5日間の間に行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップを通じて学んだことは3つあります。

1つ目は、市役所の業務は地道な作業が多いですが、そう言った作業の積み重ねが大切だということです。協議会で話し合われた内容を一字一句まとめる作業や施設間の距離を測りデータとして記載していく作業を行いましたが、市民の皆さんに正しい情報を届けるという意味でも、一つ一つの作業を怠らないことが大切だと感じました。

2つ目は、ただ作業をこなすのではなく、そのデータを見る相手の立場に立って考えることが大切だということです。

慣れない作業で時間がかかってしまうと「早く作業を終わらせなくては」ということに意識が集中してしまいそうになりましたが、市役所の方が「見る人が見やすいものを作成することが大切だ」というお話をしてくださり、意識を変えることができました。

3つ目は、障がい者や高齢者の方々の視点からみた公共交通についてです。バリアフリー環境整備推進協議会への参加を通じて、健常者の視点では気づかないような問題点や課題が現在の公共交通にあることを知ることができ、水戸の町を歩くときの見方が変わりました。

市役所の方はお忙しい中でも私の質問に対しても丁寧に答えてくださり、有意義な5日間を過ごすことができました。

4．後輩へのアドバイス

茨城大学の、特に人文社会科学部の学生は公務員を志望する人がたくさんいると思います。公務員の中でも特に人気なのは今回私が派遣先として選んだような市役所ではないかと思います。

しかしながら、市役所で実際にはどのような業務が行われているか知っているという人はそう多くはないのではないでしょうか。自分のモチベーションを向上させるという意味でも、市役所の仕事に興味のある人は早めに市役所のインターンシップに参加することをお勧めします。インターンシップに参加することで仕事の内容はもちろんのこと、職場の雰囲気も知ることができます。課によって作業内容が異なることもあるかと思うので、自分の興味のある課の仕事をまず体験してみるべきだと考えます。

私がインターンシップ先として選んだ水戸市役所の市長公室の交通政策課では、パソコンを用いた業務がほとんどでしたので、事務的な作業を体験してみたいという人にもお勧めします。

1年生の方も今のうちから積極的にインターンシップに参加しましょう。

自分の将来のために

水戸市役所　市長公室　交通政策課

人文コミュニケーション学科　2年

鹿　野　はるか

1．参加の動機

このインターンシップに参加した一番の動機は、将来の就職先として公務員を視野にいれており、インターネットや公務員について記載した冊子など文章だけでは伝わらない実際の職場の雰囲気を体感したいと思ったためである。また、1週間のインターンシップを通して、自分に公務員は向いているのか、この仕事にやりがいを感じることができるのかということも仕事を実際に経験し知りたいと考えたからである。

現在プロジェクト実習の中で、公共交通の利用促進を目指した計画を遂行しており、社会人は一つの計画を進めるためにどのように動いているのか、実際の現場を見て参考にしたいと考えた。

2．派遣先の概要と業務内容

今回派遣された水戸交通政策課は、水戸市のホームページによると、公共交通の企画及び調整に関すること、広域交通体系に関すること、高齢者・障碍者の移動等の円滑化の促進に関する法律に関すること、自転車走行空間整備に関することなどを業務内容としている。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して一番に感じたことは責任感である。今回私が任された仕事は、前回インターンシップを受けたメンバーが作成した地図に建物や主線に交わる道路を足していく作業であった。市役所の方が仕事の資料として使うものなので、実際にある建物の敷地の確認をしたり、抜けている箇所がないか、間違いはないか、何度も確認した。地図の枚数が多いこともあったが、全てを完成させるために多くの時間を費やした。今回のインターンシップで、今までバイトなどでは強く意識はしなかった責任感を感じる仕事を任され、その仕事を期限までに終わらせるという貴重な体験ができたことは自分にとって本当に有意義であったと思う。また、公務員は仕事のほとんどが資料作りなどのデスクワークを占めていることが実際の職場で働かせていただくことでわかった。

また、インターンシップ中に広告の悪い点を挙げてほしいと言われる場面があった。私は単語がわからないというたった一つしか挙げることができなかったが、友人は多く挙げていた。自分には、いろいろな立場から物事を捉える視点が足りないことをこの経験から感じた。今後の大学生活の中で、多くの視点から物事を捉える力を身につけたいと思う。インターンシップで実際の仕事に触れることによって、自分が社会人として働くために足りない力を自覚することができた。

鹿島学園の高校生が鹿島臨海鉄道の活性化を目的としたプレゼンテーションを見させていただく機会も与えていただいた。彼女たちのプレゼンテーションには、どんな人に何を目的として利用してほしいのか、数値などとても具体的であった。説得力のあるプレゼンテーションには、それを提示する根拠となる数値を示すことや、何を目的にしているかを明確にすることの必要性を学んだ。将来のためになる貴重な体験を多くさせていただいたと感じた。

4．後輩へのアドバイス

将来、少しでも公務員になろうと考えているのならば一度はこのインターンシップを受けてみるべきだと思います。その根拠は、1週間ととても長く感じるかもしれませんが、現在進行中の計画の一部の、責任が伴う仕事を経験することができたり、その職場で働く方々が普段どのように働いているのか現場の雰囲気を感じることができたり、自分のためになる貴重な体験をさせて頂くことができるからです。

また、ワードやエクセルを使った作業をおこないましたが、大変難しいと感じるものではなく、数値の入力などの簡単な作業だったので、パソコンを扱うことに苦手意識がある方でも大丈夫だと思います。

市民を支える
～公務員という仕事を通して～

水戸市役所　市長公室　交通政策課

人文コミュニケーション学科　2年

大　山　愛　莉

1．参加の動機

私は幼いころ自分の将来に不安を感じていた。1993年～2005年の就職氷河期に苦しむ学生、平均年収が下がっていて生活が厳しい、リストラされるサラリーマン、不景気などといった将来に明るさを感じられないニュースをたくさん見てきたからである。そんなニュースは子供の私に漠然と不安を感じさせていた。不安のない安定した生涯を送りたいと考えていた。そんな中、両親から比較的安定している職業として公務員をすすめられた。そこから公務員という仕事に興味を持つようになっていった。将来的にも地元の市役所に就職して、地元を活性化させたいと考えている。市役所職員とかかわる機会というのは、住民票といった書類を印刷してもらうということばかりである。そのほかにどのような業務を行っているか、実感することがなかった。今回、プロジェクト実習の講義を受けている縁で、水戸市役所でのインターンシップを体験できる機会をいただいた。自身が1年ほどしか水戸に住んでおらず、これが水戸を知るきっかけになればという思いもあった。以上の理由から水戸市役所交通政策課へのインターンシップに参加したのである。

2．派遣先の概要と業務内容

派遣先の概要：主な業務として、公共交通の企画及び調整に関すること、広域交通体系に関すること、高齢者・障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律に関すること、自転車走行空間整備の企画及び調整に関することなどがある。

業務内容：1,000円タクシー国田号の利用客のデータ化。K’sスタへの移動の際、JR水戸線の利用を促進するための水戸ホーリーホック観戦用のオリジナル時刻表のゲームスケジュール訂正のためのシール貼り。水戸市自転車利用の資料のための写真撮影への同行。水戸市バリアフリー環境整備区域の道順のデータ化、地図上での表示。大洗町役場への同行。水戸地方法務局への同行及び、地図の写しの交付請求。茨城県労務事務協会への同行。

3．インターンシップを通して修得したこと

水戸市役所交通政策課でのインターンシップを経験して、市役所職員の業務について詳しく知ることができた。インターンシップ前はただ漠然と公務員は事務を行うのだろうと考えていた。仕事内容にどのようなものがあるのか想像さえできなかった。今回のインターンシップではタクシー利用客の情報をエクセルに入れたり、水戸市バリアフリー計画案の道路を調べたりということを行った。どのような業務があるか実際に知ることができ、体験できたということは貴重な経験になったと感じる。どのような政策を行っているかということも分かった。同じ市内に住んでいるのに知らないことが多く、自分から積極的に動き、情報を集めるということの大切さを実感した。また、ホーリーホック観戦用の時刻表のシール貼りという細々とした作業や写真のモデルも市役所の方々が行っていることに驚きを感じた。市民のためによりよい政策を考えるということは大変だとは思うが、同時にやりがいを感じられそうである。就業への意欲がますます高まった。

4．後輩へのアドバイス

私がインターンシップを経験して思ったことは、不安がらないということである。交通政策課の皆様に懇切丁寧に業務の説明をしていただいた。私はパソコンを使う機会が少なく、図の作り方やプリントスクリーンの方法が今一つ分からなかった。しかし、そんな基礎的なことでも優しく教えていただいた。業務をしていて分からないことがあっても、きちんと説明していただいたので心配することがなかった。アドバイスとして、パソコンの使い方を一通り覚えておくのが良いと思う。業務はほとんどパソコンで行うので使い方を知っているほうがより難しい業務をこなせる。同時に基本的なことを説明していただくことへの申し訳なさを感じた。もう一つのアドバイスとして、インターン先の人と積極的にコミュニケーションをとるということである。相手との距離を縮めることで自分にとって有益な情報が得られたり、なによりもインターンシップがさらに楽しくなるからである。

「公務員」を体験して

水戸市役所　市長公室　交通政策課

人文コミュニケーション学科　2年

川　瀬　葉　月

1. 参加の動機

私が参加したインターンシップは、この根力育成プログラム対象科目「プロジェクト実習D」の授業をとることで得られた機会でした。私は公務員になんとなく興味はありましたが、仕事内容までは詳しく知らなかったので、いい機会となりました。しかし、絶対に公務員がいいと決めていたわけではなかったため、経験したうえで視野を広げるためということでもありました。また、将来社会に出て仕事をするときに不可欠な礼儀や言葉遣いを学ぶことができると思い参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は水戸市役所交通政策課というところで5日間お仕事をさせていただきました。交通政策課の主な仕事は、公共交通・自転車走行空間整備の企画及び調整などです。この5日間という期間に私が携わらせていただいた業務内容は、水戸駅周辺の主な建物間の地図上での距離の測定、交通政策課がおこなっている「ノーマイカー運動」のキャンペーンチラシの仕分け・関係先への配布のお手伝い、同キャンペーンの前回の成果の集計です。仕事内容はすべて経験がなかったものでしたので、わからないことはすべて課のみなさんが丁寧に教えてくださいました。本当にありがとうございました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップでは、パソコンを使う作業を多くしました。その中で、知らなかった便利な機能を教えていただき、そのあとの作業はもちろん、これからにも役に立つことを知ることができました。また、市役所のインターンシップに参加して、興味を持っていた公務員の仕事も体験できましたし、課の方々が働いている様子も見ることができたので、よい経験になったと感じました。

参加の動機でもあった、社会に出て仕事をするときに必要なスキルを学ぶこともでき、今までより言葉遣いに気を遣えるようになりました。アルバイトなどで目上の人と連絡をとるときに実感することができました。

機会がなければ自発的に参加することはなかったと思うので、機会があり、参加できたことは自分を少し変えるきっかけにもなりました。

4．後輩へのアドバイス

自分が気になる、興味を持っているものは積極的に体験することが大切だと思います。体験してみる前のイメージと実際の仕事が合っているとは限りません。また、その仕事が自分に合っているかどうかを見るためにも体験してみるということがいいと思います。

3年生になると自分が参加したいところに必ず参加できることは少なくなります。「まだ2年生だから…」や、「まだ時間はある」と思わないで、今できることは今やったほうがいいと思います！絶対に早いほうがいいです！

水戸市役所の仕事を体験して

水戸市役所　市長公室　交通政策課

社会科学科　2年

片　見　恵　都

1．参加の動機

私の進路の候補の一つが公務員です。そのため、市役所の仕事に興味がありました。また、私は水戸市に私の住んでいる町が合併してから水戸市民になった私は、将来もこの水戸市に住んでいきたいという思いがあるため、公務員を進路の候補と考えている私にとって、水戸市役所へのインターンシップは今後就職活動をしていく際にも役に立つと考えました。また、2年生のうちにインターンシップを経験することで、3年次でのインターンシップ本番にもこの活動をいかすことができると考えました。今回のインターンシップはプロジェクト実習を受けている人と一緒にできるということで、心に余裕を持ち、不安を相談しながら活動することができると感じ、3年次でのインターンシップ本番を前に、インターンシップを知る良い経験になると感じました。

以上のことから、インターンシップに参加することを決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

私の派遣先は水戸市役所市長公室交通政策課です。交通政策課は水戸市の道路環境の整備や公共交通機関の利用促進のための活動等を行っています。その交通政策課で、私が体験した業務は主に2つのことです。

1つ目は、交通政策課が国土交通省やタクシー会社と連携して行ったタクシーの割引運賃の実証実験の結果のデータ集計です。この事業はタクシーを借り上げ、国田地区にて1,000円タクシーを運行するというものです。そして、そのタクシーを利用した人がどんなところへ行こうとし、その際に通常かかる費用からどれだけ割り引かれたのかを算出するための一回一回あたりの情報を打ち込んでいくという作業を行いました。

2つ目は、会議の議事録の作成のお手伝いです。議事録の作成の前段階として、会議を録音したデータを文字におこすという作業を行いました。録音したデータは雑音が入っており、非常に聞き取りにくかったのですが、市役所の市民へ向けた情報公開という大切な役目の1つを担わせてもらっていると感じました。

以上の2つの業務を経験させていただくことができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して、私は、働くことの大変さと、水戸市役所の方々が普段どのような仕事をしているのかについて学ぶことができました。その学びを経て、仕事に対する認識を変えることができました。私は今まで、就職をするということを遠くに感じていました。そのため、自分の将来について真剣に考えることができていませんでした。働くことの大変さを知り、自分が今後何をやりがいにして仕事をしていきたいのかを考えなければならないと感じました。ただ給料のために仕事をするのでは辛くなってしまうと感じたので、給料以外に、仕事に目標を持つことが大切であり、その目標をたてるために、今のうちから、自分は将来どんなことをやりたいのか、仕事に求めるやりがいは何なのかを考えなければならないということを強く感じることができました。この考えを忘れずに、今後の大学生生活を送り、よりよい未来を築いていく準備をしていきたいと思いました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加するということは、自分の将来を深く考えることにつながると思います。やりたい仕事をまだ決めることができていない人は焦りを感じることもあると思います。私も候補はあっても明確に決めることはできていません。そのため焦りを感じていました。しかし、焦りを感じるからこそ、私は、インターンシップに参加することを決めました。インターンシップに参加することで、自分の将来のヒントを得ることができると感じたのです。実際に参加したことで、仕事を決めるためのヒントを得ることができました。何事も知らないと決めることはできません。まだ将来やりたいことを見つけることができていないのだったら、とりあえずインターンシップに参加してみてください。参加することでたくさんの発見を得ることができます。また、インターンシップに参加することに不安があるのだったら、友達を誘ってみたり、プロジェクト実習のインターンシップに参加してみたりしてみてください。仲間がいるということは不安を和らげてくれます。インターンシップに参加することで見えるものがあります。自分の将来に迷っているのだったら、ぜひインターンシップに参加してみてください。

誰のためなのかを考える

水戸市役所　市長公室　交通政策課

社会科学科　2年

五位渕　　梓

1．参加の動機

市役所というものは、とても身近な存在であるように思いながらも、実際にどのような仕事をしていて、どのような役割を果たしているのかはあまり把握していなかったため、市役所での仕事内容に関して興味があったから。市役所は、市民のために何かをしているというイメージであったため、自分も将来、人の役に立てるような仕事をしたいので、市民のために仕事をしている方々の姿を見て、勉強したいと思ったから。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課は、水戸市の公共交通を市民がより使いやすく、便利になるような企画や調整を行っているというのが主な概要である。私が行った業務としては、観光スポットなどの施設間の距離をパソコンで地図を利用して計測し、記録したり、交通政策課にある資料の整理をしたり、市民から、ある信号の待ち時間が長すぎるという情報提供があり、実際にどうなのかを直接その場に行って検証したりをした。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して習得したことは、集中力であったと思う。基本ほとんど一日中パソコンを使った事務作業であったため、ずっと座りっぱなしでひたすらパソコンを使い続けるという機会が今までに全くなかった自分にとっては、とてもきつい仕事であったが、比較的集中して仕事をすることができ、自分でもやればここまで集中できるということが分かった。また、仕事を誰のために行うのか、何のために行うのかを考えて仕事をするということも習得できた。仕事を誰かのためにするというのは、よく聞く当たり前のことのように思えるが、実際にアルバイトなどではそれができず、いつもとにかく仕事をして給料をもらうというものの繰り返しであった。しかし、水戸市役所の方々は、どんなに忙しく、細かい大変な仕事でも、まずは「市民のために」を考えて仕事をこなしていて、自分にはできていなかったことだと大きく実感し、誰にために行うのか、どうしたら喜んでもらえるのかを考えながら仕事を行えるようになった。

4．後輩へのアドバイス

このインターンシップでとても感じたことは、パソコンができるかできないかで、仕事の進み具合に大きく差が出るため、パソコンは最低限のことはできるようにすべきであるということである。高校や大学の授業で、パソコンについての基礎的なことは学習してきたが、自分はあまり真剣に取り組まず、ただ先生がやったことを再現するだけという感じであったため、実際になにも見ずにやる、誰も教えてくれない環境でやるということになったら、本当であったら省けるところも無駄に時間を費やしてしまったということが多々あった。今まであまりパソコンを使った業務を行っていなかったため、このインターンシップで、今までのパソコンの授業の大切さ、重要さに気づかされた。なので、ぜひパソコンの授業を侮らずに真剣に受け、パソコンを使いこなせるように頑張ってほしい。

パソコン技術に加え、コミュニケーション能力の大切さも感じた。インターンシップの期間中、市役所では、電話がかかってきて対応を行うといった姿を何度も目にした。電話対応は、どのような仕事でも必要となる業務であるため、どれだけスムーズに用件を聞き理解し、相手に不快さを感じさせずに話せるかというのがとても大事だと思った。市役所の方々は、どんなに忙しくても、それが行えていてすごいと思った。

このようなことに気づけたのも、このインターンシップに参加したからである。身近にありすぎていて気づけない大切なことに気づける機会であると思うので、ぜひ、興味のあることでいいので、インターンシップに積極的に参加してほしい。

インターンシップから プロジェクト実習へ

水戸市役所　市長公室　交通政策課

社会科学科　2年

堀　　奈津美

1．参加の動機

公務員を進路の一つとして考える中で、市役所がどのような仕事をされているのか興味を持ち、実際に体験してみたいと思ったからです。プロジェクト実習で私たちのチームは水戸市の公共交通をより多くの人がより快適に利用できるようにすることを目的として活動しています。その目的を達成するためには、まず水戸市の交通がどのような問題を抱えているのか、どのように解決していくべきか深く知っている必要があり、そのための良い機会であると考えたからです。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課は水戸市役所臨時庁舎内にあり、水戸市の交通に関する問題の調整・利用促進を行う部署です。私がインターンシップさせていただいた期間には水戸市内のバリアフリー環境整備に関する会議が実施され、実施案や策定スケジュールの確認、有識者の意見交換が行われました。会議を傍聴させていただき、録音した音声を聞きながら文字として起こし、議事録作成のお手伝いをいたしました。バリアフリー環境整備の資料として用いるため、主な建物や道路の名称とともに未整備の経路を地図上に記載した経路図をパソコンで作成する作業、建物間の距離を測り表にまとめる作業などを行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は水戸市役所でのインターンシップを経験して、情報を整理し、伝えるため工夫を凝らす力を得ました。経路図は様々な情報を1枚にまとめねばならず、単純に情報を打ち込んだだけではどれが重要なものなのか分かりにくくなってしまいました。アドバイスを頂きながら、大きさや色、配置を調整し重要なものを一番目につくようにしていきました。こうして修得した力はインターンシップの時に限らず、プロジェクト実習での案内板作成にも活用できる力であると感じました。案内板は目を引くようなデザイン性と、知りたい情報がすぐに分かるような見やすさを兼ね備えたものでなければなりません。インターンシップで学んだことを活かして良い案内板にしていきたいです。ものづくりは、一番伝えたい情報は何か、誰に見せるのかといったことを考え、そのうえでどのようにすれば伝わるのか工夫がなされているものであること、そういった工程を踏んだものづくりの奥深さを改めて知りました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップ生は複雑な業務を指示されることは基本的にないと思います。それをやりがいがないと捉えるのではなく、なぜこの仕事が必要なのか、自分ができることは何かを考えながら、より良いものに仕上げるよう工夫することを心がけてほしいです。派遣先の方はただ労働力としてインターンシップ生を受け入れて頂いているのではなく、私たちの学びに期待して、ねらいがあって仕事を任せていただいているのだと思います。そのねらいを読み取って学びに行ってほしいと思います。頑張ってください。

早期インターンシップの利点

水戸市役所　市長公室　交通政策課

人文コミュニケーション学科　2年

池　田　真梨果

1．参加の動機

大学の長い夏休みを利用して何かできないかと考えていたとき、「プロジェクト実習D」の存在を知りました。根力育成プログラム対象科目であるこの授業を履修すると、プロジェクトの一環として夏休みに水戸市役所でのインターンシップに参加できます。将来公務員になることも視野に入れている私としては2年生で市役所の様子を知るいいチャンスだと思い、プロジェクトの一環として夏休みに5日間インターンシップに行きました。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所交通政策課は2015年に新設された課であり、主として公共交通の企画や調整を行っています。また、人々の移動の円滑化に関する法律や自転車の走行に関する企画や調整もしているそうです。

インターンシップではWordやExcelを使用して水戸市内の経路や施設を書き込み、図を作る作業を中心的にしました。また、水戸市役所が行っている「ノーマイカー運動」という、公共機関を使用し通勤するキャンペーンの資料を各企業に配布するお手伝いもしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

「修得した」と自信を持って言えることは、まずインターンシップ中に一番多く行ったWordとExcelでの作業で、それぞれの操作方法について以前よりも詳しくなったことです。作業効率の上がる方法を市役所の方から教えていただいたおかげだと思います。本当にありがとうございました。初日には仕事に不慣れでなかなか進まず、焦ってしまいましたが、最終日には操作にも慣れて仕事を進めることができました。やっとある程度できるようになった日が最終日だったので、自分の仕事を最後までやり遂げることができなかったことを悔しく思いました。

それから市役所の方、資料配布先の企業の方など多くの社会人の方にお会いし、たくさんのお話を聞くことができました。5日間市役所で社会体験をしたことにより、社会で必要なマナーや意識を体感して実践することができました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに早期から行くことで損することはありません。むしろ早く行くことで、より多くの職場を見学・体験することができるという利点があります。もしインターンシップ参加を早いうちから考えていて迷っているなら、是非参加することをおすすめします。私の場合は2年生で初めて行きましたが、興味のある業界のインターンシップの情報があったら何年生であっても、どんどん参加してその職場の様子を知っていければいいと思います。私も来年はまたインターンシップに参加して知識を深められたらと思います。

自分を見つめなおす インターンシップ

水戸市役所　市長公室　交通政策課

人文コミュニケーション学科　2年

井　上　晴　香

1．参加の動機

私は将来、人と関わる仕事をしたいと思っている。市役所は、市民のために働く。そのため、自分のやりたいことに近いと感じていた。しかし、市役所の仕事は多岐にわたり、実際どのような仕事をしているのかがわからなかった。水戸市役所市長公室交通政策課が、どのような形で市に貢献する部署なのかも知りたかった。よって、今回インターンシップの機会をいただき、張り切って参加した。

2．派遣先の概要と業務内容

市役所は、地域社会をつくる。その分野や仕事内容は様々である。私がお世話になった交通政策課も様々な交通の問題やイベントなどにかかわっており、本当に多くの業務があることがわかった。

その中で、私が経験した業務内容は、主に3つある。

まず1つ目は、会議の会話を文字に起こす作業である。音源は、交通政策課以外の課との合同の打ち合わせであった。私は、市役所というと担当が明白に分かれている印象があった。そのため、2つ以上の課が一緒に仕事をしていることに驚いた。

2つ目は、鹿島臨海鉄道を盛り上げる中高生のイベントに参加した。ここでは、他の市町村の市役所の方々と会う機会があることがわかった。同じ仕事をする同業者と話すことがあるというのは、刺激をもらえて魅力的だと思った。

3つ目は、自転車の乗り方と矢羽根型路面標示についての紙面を考えた。市民とのコミュニケーションが、直接だけではなく、文字を介したコミュニケーションもあることを再認識し、そういった仕事があることを知ることができた。

全然見えなかった市役所の業務内容は、一言では言えないほどの量であるからかもしれないとインターンシップを経験して思った。また、市役所で働くには、その地域が好きだ、という気持ちが大切だとわかった。そういった交通政策課の方々の姿や話を聞けたことが今回1番の収穫だった。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は今回のインターンシップをしながらずっと考えていたことがある。それは仕事に対する姿勢である。私は、就職先に休みが確実に取れるということを第一に考えていた。しかし、市役所で働く皆さんを見て、一生働く場所に対して自分が適当に考えすぎていると感じた。交通政策課の皆さんは、よりよい生活を市民に提供するために働いていた。とても真剣でかっこいいと思った。自分の生活のことばかりを考えている私はまだまだだとも思った。

働くとは、単にお金を稼ぐことではないのだと思う。頭ではわかってはいても、行動が伴う気がしない。それは私が仕事というのを真面目に受け止めていないからだとインターンシップを通して感じた。自分が真剣に取り組めることは何なのか、これからどうしたいのか、自分を見つめる時間を作ることから始めたい。

また、市役所の業務内容が、事務的なことだけでないことも体験的に知ることができた。デスクワークの印象が強かったため、あれほど真剣な話し合いが行われていること、時には外での仕事もあることがわかった。

このように自分の将来を考えるきっかけをくださった水戸市役所交通政策課の方々には、感謝の気持ちでいっぱいである。

お忙しい中、私たちために時間を割いて下さり、本当にありがとうございました。

4．後輩へのアドバイス

私は、今回のインターンシップで市役所の仕事を以前より詳しく知ることができただけでなく、自分のこれからについて考えるきっかけもいただけた。後輩の皆さんには、チャンスを大事にしてもらいたい。社会人の方と直接話す機会が学生のうちにとれるこのプロジェクト実習は、学生にとって本当に貴重である。ぜひ受講してもらいたい。

市役所での仕事で得られたこと

水戸市役所　市長公室　交通政策課

社会科学科　2年

大　場　貴　史

1．参加の動機

現在、プロジェクト実習において取り組んでいる、公共交通チーム「いばっピ団」の活動において、水戸市役所市長公室交通政策課課長の須藤文彦様にお世話になっていることもあり、このインターンシップに参加しました。また、僕は将来、公共交通に関わる仕事に就きたいと考えており、そのためにも、交通関係の職場でのインターンシップに参加したいと考えていたことも、参加した動機の一つです。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課は、バスや鉄道などの公共交通や、自転車走行のための道路整備など、交通に関わる様々な業務を行っています。僕がインターンシップの期間に行った業務は、与えられた情報をもとに、パソコンを使って地図上に経路や施設名を記入し、その情報をExcelに入力するという作業でした。職員の方によると、このような地図とデータを作成し、この2つを見ればその場所のことが何でも分かるということを目的としているそうです。この他にも、市民の方からの意見をもとに、信号機の調査に行く際に、同行させて頂きました。職員の方々は、市役所の外で業務を行うこともあるとのことなので、そのような業務を体験することができ、とても良い経験となりました。

また、作業の合間に、プロジェクト実習での作業を進める時間を頂けました。現在取り組んでいる水戸駅北口4番乗り場のバス案内板の貼り替えについて、職員の方から直接ご意見を聞きながら作業を進めることができ、とても有意義なものになりました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通じて、「与えられた作業を確実にこなす」ということが大切だと感じました。パソコンでのデータの入力などは、一見地味に思える作業でしたが、どんな仕事においても、このような作業が土台となっていると考えると、やりがいを感じることが出来ました。また、そのような作業をこなしていた時、何の・誰のための作業なのか分からなくなってしまったことがあったのですが、市民の方が意見を言うために市役所にいらっしゃった時、今やっている作業は、市民の方にとって役立つための仕事なのだと感じました。このように、どんな仕事も誰かのためにやっていると考えることが、大切だということが分かりました。また、将来職に就いた時、「どのような仕事も、地道で基本的な作業の元で成り立っている」ということを意識して、自分のやるべきことをこなしていくようにしたいです。

4．後輩へのアドバイス

まず、WordやExcelといったPCソフトは、極力使いこなせた方が良いです。これらを使いこなせれば、作業の効率がとても良くなります。インターンシップ以外の場でも非常に役に立つので、是非慣れておいてください。また、「与えられた作業を確実にこなす」ということが大切だと思います。また、インターンシップ先の仕事内容などについて、事前に調べておくことをお勧めします。そうしておけば、インターンシップを始めた時に、仕事の内容などの飲み込みが早くなると思います。この他にも、インターンシップ中に作業を進める中で分からないことなどがあったら、積極的に質問することが大切だと思います。質問することは恥ずかしいと感じる人もいるかもしれませんが、分からないまま作業を進めても、良い成果は得られません。分からないことがあったら、積極的に質問するようにしましょう。

インターンシップは、必ず将来に役立つものであると思います。それを、有意義なものにできるように、是非工夫して臨んでください！

足りていないものを実感

Domaine MITO　株式会社

社会科学科　2年

鶴　町　直　輝

1．参加の動機

Domaine MITO様のインターンシップはプロジェクト実習という授業の中で参加しました。もともと、大学生のうちにしてみたいこと、大学生のうちだけしかできないことをできる限り多くしたいと考えていたので、参加を決めました。

私はこのインターンシップを通して、普段、もしくは一生かかわることのないような経験と、コミュニケーション能力やスピーチなどの話す技術、行動力や積極性を学ぶことができると考え、参加を決めました。あと、友達を増やしたかったからです。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO株式会社は、2015年に立ち上げられました。県内でブドウの栽培をして、水戸の市街地にある泉町会館でワインを醸造している地域に密着したまちなかワイナリーです。ワインを作って終わりなのではなく、ワインをツールとして、ワインを売るだけでなく、ワインづくりや、畑を観光資源とすることで、生産地や、消費地など様々な場所や人をつなぎ、交流を増やし、地域を活性化させていくことが目的です。そのために、ワインに関連したもの、地域に関連したものなど多くのイベントに参加しています。また茨城大学だけでなく、ほかの学校とも協力をなさっています。

今回のインターンシップでは、9月24日にまちなかフェスティバルでの出店での売り子、アペリティフ365の設営、片付けなどの手伝いをさせていただきました。他校の方々とブースに来てくださった方に商品を売るなか、アペリティフ365や、Domaine MITOの紹介をしました。会場設営のほうでは、ホテルの方や車の会社の方などを手伝い、外のブースを設営しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

学んだものの中で特に自分にとって大きいのは、連絡を取ることの重要性、完全に伝えることの難しさ、前準備の大切さの3つです。今回のインターンシップを通じて多くのことを学び、新しいことを体験することができましたが、この3つは特別感じました。自分がメールを見落とすことや、こまめに連絡を取らないことで起きる失敗や、失礼があること。チームの中で、先生方との連絡の齟齬や、取らないことで動きが止まってしまうことのまずさを強く感じました。また、メールなどの作法、文章の作り方の重要性も知りました。これらを疎かにしてしまい失礼な文章、分かりづらい文章にしてしまい齟齬を多くつくってしまいました。話し合いの場でも反省の点は多かったです。逆にもっとしっかり連絡を取っていれば、うまく伝えることができたのなら、しっかりと準備をもって行動できたのなら、もっとスムーズに活動ができ、多くの経験がつめたのではないかと悔やみます。反省点をいかし、次から頑張っていこうと思います。また、設営や売り子をさせていただくなかで、お客様であるアペリティフやまちなかフェスティバルにいらっしゃった方、同じくイベントを作り上げていく方々など、イベントの中には様々な人がいて、関わり合い、作っているということを、客としてではない目線から見ることができたのは、本当に貴重な体験でした。

4．後輩へのアドバイス

何を学びたいのか、学ぶためにはどうすればいいのかなどをよく考えていくこと。考えたことを実行していく、自分から多くのことにかかわっていく積極性。意見や、考えを周りに伝えられる、良い関係を築けるコミュニケーション能力など、多くの面で人並みであることが前提として要求されていたのかなと考えます。私にはどれも足りていないので、グループの人や先生方、協力をしてくれている宮本様、周りの方々に多くのご迷惑をかけてしまいました。正直に言って何がわからないのかがわからない状態が多かったです。

ですが、このインターンシップで学んだことは多くあります。今自分に何が足りていないのかが知れたというのも、とてもありがたかったです。また教えられるのではなく、自分で学んでいくことの大事さと大変さをしることができました。辛いからこそ、得られるものもあります。友達も増えました。

ワインを通して学んだこと

Domaine MITO　株式会社

社会科学科　2年

三　枝　奈　央

1．参加の動機

私は大学生活の中で、バイト以外では社会に出て活動する機会がありませんでした。大学生のうちに社会勉強になることを体験してみたいと思っていました。私は茨城県の出身ではないのですが、大学4年間を水戸で過ごすことになったことを生かし、水戸という地域で行われている活動に参加したいと思っていました。プロジェクト実習の授業では、地域と関わる機会を得ることができると思い履修を決めました。Domaine MITO株式会社様は水戸産のワインを作っているということで、ワインについての知識は全くありませんでしたが、ワインを売るだけでなく、ワインをツールとして地域の活性化を行っているという点にもとても魅力を感じました。

私は将来、地元の活性化に携わることができる職業に就きたいと思っています。しかし漠然としたもので、はっきりとした目標は持てていませんでした。このDomaine MITO株式会社様との活動を通して何か将来に役立つ経験を得られるのではないかと思い、参加を決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO株式会社様は、水戸初のワイナリーで、ぶどうの栽培、ワインの醸造まですべてを行い、販売をすることを目指して2015年に作られた企業です。Domaine MITO株式会社様のワインは水戸市内の泉町会館という場所で造られています。ワインを通してぶどうの生産地と水戸だけでなく東京などの消費地をつなぐ役割も果たしていいます。ひとくちオーナーという制度があり、1口1万円から申し込むことができます。ひとくちオーナーになるとぶどうの栽培や収穫、醸造体験ができるなど貴重な体験ができる特典が付いてきます。ワインは、京成百貨店などで売られていますが、東京や茨城での販売会でも販売しています。今回はこの販売の業務を行わせていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップでは、9月24日に行われた水戸まちなかフェスティバルの中でワインを販売しました。前を通りかかった人に「水戸産のワインです」と伝えると、興味を持ってくださる方が多かったです。Domaine MITO株式会社様のワインのことを知っている人も、もちろんいました。しかし水戸でワインを作られていることを知らない人も多かったので、もっと知ってもらいたいと感じました。当日は、ホテル・ザ・ウエストヒルズ・水戸で「アペリティフ365 in 水戸」というワインのイベントが行われていました。少しの間でしたが見学させて頂きました。スケジュール表を見させていただき、このイベントには入念な準備があったということを知りました。今回のような大きなイベントは早い段階から計画を立て、きちんとスケジュールを管理して行うことが大切なのだと感じました。

自分から声をかけてワインを紹介し、売れたときはとてもうれしかったです。勇気を出して自分から積極的に売ろうとする姿勢が大切だと感じました。

ワインの販売を通して水戸の様々な年代の方々と接する機会を設けてくださったDomaine MITO株式会社様にはとても感謝しています。本当にどうもありがとうございました。

4．後輩へのアドバイス

今回のインターンシップは、準備の段階から関わるのではなく当日の運営のお手伝いをするという形でした。準備の段階から関わることができるのが一番良いと思いましたが、準備には参加できませんでした。当日の運営もとても勉強になりましたが、やはり準備の段階から関わることができれば、さらに学べることが増えると思いました。積極的に様々なイベントに参加することが大切だと実感しました。大学生2年生から社会に出る体験ができるというのは、これからの大学生生活にだけでなく、社会に出た時にも役立つと思います。ぜひ社会勉強ができるこの授業を活かし、大学生をさらに充実させて欲しいです。インターンシップをすると働く大人の人達を間近で見ることができるので、バイトとは違った社会勉強ができます。

酒類業界と地方創生

Domaine MITO　株式会社

社会科学科　2年

水戸部　麻　実

1．参加の動機

私は将来、地元に帰って公務員になろうと考えています。私の地元は過疎化が進んでいて町が寂れたものとなっているので公務員の立場から地方創生に関わりたいと思っています。

私のインターンシップ先であるDomaine MITO株式会社様は水戸産ワインを通じて泉町二丁目の活性化に取り組んでいらっしゃいます。つまり私の目指している行政の立場ではなく企業の立場から地方創生に取り組んでおられるのです。

このように地方創生は行政と企業、官民共同で行うものですので、私が将来公務員になるとしたら行政の立場からの地歩創生だけでなく企業の立場からの地方創生も学びたいと思い、Domaine MITO様のインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO様は泉町二丁目の泉町会館にあるまちなかワイナリーで水戸産ワインを生産していらっしゃる企業です。まずまちなかワイナリーに関して、ワイナリーがまちなかにあることによってニーズを捉えやすく、省スペース、スモールビジネスでできるという利点があります。次に水戸産ワインに関して、茨城は首都圏に近いのでブドウは生食用にすることが多く、加工用のブドウの生産は少ないのでワイン生産はほとんどありません。そこで生食用にできなくなったブドウの使い道としてワインにするという道を示すことができます。このまちなかにワイナリーがあるという意外性、「水戸産ワイン」は水戸出身の人にとっては「地元産ワイン」、水戸市外の人にとってはおみやげとしてお買い求めいただくという強みがあります。

午前は社会人の時間の使い方など社会人の現状、日本の酒類業界についてのレクチャーをいただきました。お昼にかけて水戸駅のジュピターコーヒー、ビックカメラ、北野エース、京成百貨店のワインコーナーでそれぞれどのような工夫を施してワインを販売しているのかを見学しました。いちばん印象に残ったのは意外とこの4店の中でワインの品揃えが充実しているのはビックカメラだということです。午後は4店がどのような工夫を施していたのかをそれぞれ発表しDomaine MITO株式会社代表取締役宮本紘太郎様にまとめていただきました。その後はDomaine MITO株式会社、今年のDomaine MITOの新作ワインについてのレクチャーをいただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップに参加する前はDomaine MITOのプロジェクト実習に参加させていただいてるにも関わらずDomaine MITO、ワインに関する知識がほとんど皆無でした。今回のインターンシップに参加しDomaine MITO、ワインに関する知識が増えました。

また、水戸駅、京成百貨店のワインコーナーを見学し宮本様にレクチャーを受け、経営学がどのように社会で役立っているかが分かりました。それぞれのお店のコーナーでマーケティング層に合わせた価格設定（price）、商品性（product）、プレゼン（presentation）、売り場（place）の4つのPを活用させていることが分かりました。

4．後輩へのアドバイス

持っていくメモ帳は縦に開く形式のものはメモをできる量が少なく、ルーズリーフなどは机などを汚してしまう可能性もあるのでノートのような横に開く形式のメモを持って行ったほうが便利です。また、事前準備は大事です。レポートでどのようなことを問われているかなど、事前に何を聞いておくべきか考えておくと良いインターンシップになると思います。

社会人疑似体験とは

Domaine MITO　株式会社

社会科学科　2年

今　川　菜津美

1．参加の動機

私は、大学生活で何か自分を成長させることがしたいという些細な理由でこのプロジェクト実習を履修した。社会人疑似体験ということで、さまざまな社会人ルールを学ばせていただいた。受け入れ先のDomaine MITO株式会社様は、お忙しい中、さまざまなアドバイスや経験をくださった。大学で講義を受けているだけでは、到底体験できない貴重な体験である。当初、私が考えていたよりもかなりハードな授業だが、1年後には確実に成長していることが予想される授業だと思う。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO株式会社は、設立2年目のワイナリーで、水戸のまちなかにある泉町会館でワインの醸造を行っている。代表の宮本紘太郎様は、ワインを販売することはもちろん、ワインをツールにして、地域活性化をすることを目標としている。

9月24日、Domaine MITO株式会社主催の「アペリティフ365 in 水戸」のレセプションを屋外のブースで行った。水戸産ワインの販売に加え、水戸にフランスの風を吹かせようというコンセプトの元、フランスのパスティスというお酒やシャンパン、フランスのお菓子を販売した。

3．インターンシップを通して修得したこと

商品を販売するということは、その商品を宣伝するために理解を深めることが大切だ。ワインを買い求めてくださったお客様のほとんどがDomaine MITOを知っており、説明に苦労したということはほとんどなかった。ただ、一番印象に残っているのが、普段ビールしか飲まないというお客様に対して、フランスのお酒を販売したことである。こういうことをきっかけにして、フランスのこと、ひいては、日本ワインについての理解や認知が広がっていくといいなと思った。今回の場合はお客様への直接の発信であった。そこで気づいたことは、丁寧に発信しなければならないということだ。雑談を交えながら、笑顔で丁寧に接客するとお客様もこちらの話に耳を傾けてくれた。この発信とは、当たり前のことだが、案外難しいことだ。

また、コミュニケーション能力も身についた。宮本様はじめ、多数の協力者様と他校のインターンの方々と協力して行ったこと、お客様と対話したことでたくさんの交流をすることができた。その場面に合ったコミュニケーションの仕方を学ぶことができた。まとめると、私がこのインターンシップで学んだことは、丁寧に発信することと、場面に合ったコミュニケーションの仕方である。

4．後輩へのアドバイス

私が特に苦労したことはスケジュール管理である。自分のスケジュールはもちろんだが、チームみんなでのスケジュール調整が難航し、外部の企業様にはとてもご迷惑をおかけした。しかし、外部の企業様からのアドバイスとして、①全員で集まろうとしない。②「調整」という意味をはき違えない。つまり、「調整」ということは、この日に集まると決めたならば、予定を入れないことはもちろん、予定がある場合は既存の予定を別日に移動させるなどの工夫が必要であるとおっしゃっていた。比較的スケジュールが合わなかった私たちのチームは、夜の9時に集合するなど自分たちの生活スタイルに合わせて集合していた。

ただプロジェクト実習をする、ただインターンシップをするでは到底学びにつながらないので常に目標を持たなければならない。その目標はしばしば忘れてしまうことが多いので、行き詰まったり、周りが見えなくなったならば原点の目標に立ち返ってみるとよいかもしれない。

「まちなかワイナリー」で学んだこと

Domaine MITO　株式会社

社会科学科　2年

中　野　拓　哉

1．参加の動機

私がプロジェクト実習Dへの参加を決めたのは、この授業が一年を通して目的達成に取り組む「PBL型学習」と実際に就業体験ができる「インターンシップ」という二つの要素を併せ持っており、普段はなかなかできない貴重な経験になるというところに大きな魅力を感じたためです。コミュニケーション能力やチームワーキング能力は社会に出て働くうえで極めて重要です。しかしいろいろなことに挑戦しようと思ってはいても、実際に行動するとなると難しいものです。授業の一環としてこうした活動に取り組めるということで、また社会人の基礎力を身に付ける場として絶好の機会だと思い参加を決意しました。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO株式会社は、一昨年の10月に設立された新しい会社で、茨城県産のぶどうを使用し泉町会館にて醸造を行っているまちなかのワイナリーです。ワインをツールとしたコミュニティの拡大を目的としており、各種イベントへの出店はもちろん、「ひとくちオーナー」制度や収穫・醸造体験等の企画運営も行っています。

このインターンシップでは、9月24(日)に行われた「水戸まちなかフェスティバル」への企画出店「アペリティフ365 in 水戸」の運営補助と外販、接客の業務に携わりました。会場となったホテル・ザ・ウエストヒルズ・水戸のバンケットルームではフランス人の講師を招いての講演会やシャンソンの演奏などとともに、気軽にお酒や軽食を楽しむフランスの文化を伝える「アペリティフ」のイベントが催されました。また会場の外でもテントを張りブースを設け、Domaine MITOの赤ワインをはじめビールやシャンパンなどのフランスのお酒と笠間駅前にある有名なフランス菓子店「グリュイエール」の焼菓子セットを販売しました。ブースが駅から遠く少し奥まった場所に位置していたこともあったせいか、売れ行きはあまり好調ではありませんでしたが、来て頂いたお客様はDomaine MITOを知っている、興味があるという方が多く、ワインを通じた交流が生まれコミュニティが広がるその場にいることができ、とても感慨深く思いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して、特にコミュニケーション能力とチームワーキング能力の向上を実感しました。実際に接客しワインを販売するにあたり、来て頂いたお客様にDomaine MITOの紹介やそのワインの特徴を自分の言葉で説明するということは、学生であってもプロとしての質が求められ、責任ある態度で業務に臨む必要があります。私は9月3日(日)に開催された「牛久シャトーフェスタ」のイベント出店の際も、ワインの販売と接客を経験しました。それを踏まえての「水戸まちなかフェスティバル」だったので、得た知識や情報を活かしながらお客様とのコミュニケーションを通じてDomaine MITOのワインや取り組みを知ってもらえる、あるいは興味をもってもらえる説明ができた時は、達成感も一入でした。またこのイベントには筑波大学や茨城県立農業大学校の学生もインターンシップとして参加しており、チーム内はもとより、チームを越えて協力し新たなつながりが生まれたことも大きな収穫でした。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップを含めこの授業では、連携して頂いたDomaine MITO株式会社の宮本様をはじめ諸先生方の力添えのおかげで活動を充実させることができました。とりわけインターンシップは、本来の業務もあり多忙にもかかわらず私達のために時間を割いてプログラムを組んで頂くということなので、目的意識を明確にして積極的に取り組むことが必要です。当日になって慌てることのないように事前の準備や学習を十分に行い、また連携先への感謝の気持ちを忘れずにインターンシップに臨むべきです。PBLにインターンシップにとボリュームたっぷりの授業ですが、大学の授業だけでは決して得ることのできない視点やノウハウを実践的に身に付けることができます。学生である今だからこそできる活動に、皆さんも是非取り組んでみませんか？

社会人になる前に学ぶべきこと

Domaine MITO　株式会社

社会科学科　2年

大　徳　ちはる

1．参加の動機

私が今回、このインターンシップに参加させていただいた動機は、地域の方たちと交流をすることができると考えたからです。私が地域との交流を重視する理由は、将来自分がしたいと考える仕事の一つとして、地域を活性化させる仕事に携わりたいと考えているからです。派遣先であるDomaine MITO株式会社様の、ワインをツールとしてまちなかを活性化させ、地域とのコミュニティ形成をはかるという考え方に共感し、今回のインターンシップを通して、地域の方々と少しの時間でもコミュニケーションをとることができたらと考え、参加させていただきました。

2．派遣先の概要と業務内容

派遣先であるDomaine MITO株式会社様は、水戸の市街地にまちなかワイナリーをオープンし、ただワインを作り販売するのではなく、「水戸市で作られたワイン」というキーワードをもとに水戸市と近隣の農村などの絆をつなぐ参加型のコミュニティ形成をはかることを目的としています。水戸初のまちなかワイナリーが茨城の新しい魅力となるため、地域の方々との様々なコミュニティをつくるため、ワイン造りなどのワークショップを通して地域の活性化に取り組んでいます。

今回のインターンシップでは、9月24日（日）に開催された、水戸まちなかフェスティバルでの「アペリティフ365 in 水戸」という室内で行われる企画の一環として、屋外でのワイン販売のお手伝いをさせていただきました。業務内容としては、販売の場としてのテント設営、グラスワイン・フランス産のビールなどの販売を行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、地域を活性化させたいと考えたときに、実際に地域の方たちと交流する機会をもつことが、いかに大切かということを学びました。私は今まで水戸のイメージとして、人が少なく活気があまりないというイメージを持っていましたので、活性化させることは難しい課題なのではないかと考えていました。しかし、実際に地域の方々と交流してみて、お年寄りの方や小さなお子さんがいる方など、一人ひとりに活気があり、明るい印象をもちました。なぜ今まで私が水戸に対して、マイナスなイメージを感じていたのか考えたところ、人には活気があるが、地域間での交流をする機会が少ないため、水戸に対して全体的に活気がないというイメージを感じていたのではないかと考えました。そのため、地域の人々が交流し、かかわりあう機会を増やすことで、水戸の活性化は大いに期待できると感じました。このような考え方の変化は、実際に水戸で開催されたイベントに、販売員として参加できたことで得られたものです。今回の水戸まちなかフェスティバルでのワイン販売という業務は、私たちチームの事情により企画の段階から携わることはできませんでしたが、私にとって非常に有意義なインターンシップになりました。将来、地域を活性化させるような仕事についた際には、その地域の人々と直接交流し、そこで感じた地域の雰囲気などを大切にしていきたいと考えました。

4．後輩へのアドバイス

私は今回のインターンシップに参加させていただいて、このような経験をするのはできるだけ早い方がいいと感じました。多くの学生は3年生でインターンシップに参加すると思います。しかし、早いうちに企業の方と関わり社会で働くことを擬似体験することで、働くということに対して今までとは違った価値観や考え方を持つことができると考えます。したがって自分の職業選択における視野を広げることが可能になり、明確な意欲を持って就職活動に望むことができると感じます。また、インターンシップに参加するにあたって気をつけるべき点は、スケジュールの管理能力が求められるということです。プロジェクト実習のように、長期的に企業の方と関わりを持たせていただく中で、授業やアルバイトなどと重なり、自分の時間に余裕がなくなってしまう時期が必ずあると思います。そのような時期に、いかに時間を有効に使うかということや、無理のないスケジュールを組むことができるのかということが重要になってくると思います。このようなスケジュールの管理能力は、社会人になってからも役に立つ力だと思うので、ぜひ身につけてほしいと考えます。

ワインを通してつながりを作る

Domaine MITO　株式会社

社会科学科　2年

吉　川　奈緒子

1．参加の動機

私がこのインターンシップに参加した理由は、1つは水戸まちなかフェスティバルに参加することによって、町の人たちとじかに話をして、情報を得られると思ったからだ。町を活気づかせるには何が必要か、現時点で何が足りないのか。そして参加させていただいているDomaine様のワインの知名度をじかに実感することで、自分たちがこれからしなくてはならないこと、現時点での知名度について知ることができそうだと思ったからだ。2つ目には自分自身の学びである。これだけのことをするにはどれだけの準備が必要で、どれだけの人が参加、協力してくださっているのかを知ることで自分が将来物事を動かそうと思った時の指標になると考えた。今回は販売業務だったので、お客さんの反応を見ることで接客に必要なこと、興味を持ってもらうため、目を引くために何が必要なのかを考えて行動するきっかけになると考えた。

2．派遣先の概要と業務内容

今回参加させていただいた会社はDomaine MITO株式会社様だ。代表取締役は宮本紘太郎様。現在先代から続く宮本酒店の六代目店主も務めながら経営されている。自身の中で、都市部でワインを造るという構想を持ち、すでに日本で実践しているところもあると知り、水戸でもワインを造ろうと、平成27年10月に起業された。ワインの消費だけではなく、葡萄の収穫、醸造を体験できる活動もおこなっている。町中でワインを醸造することで地域の交流もできる。水戸だけでなく、東京などほかの都市とのつながりも持っている。参加させていただいた9月24日の水戸まちなかフェスティバルでの業務は、Domaine様のワインと、何種類かのお酒、洋菓子を販売する業務と当日の会場の設営、片付けである。そして同時に開催していたアペリティフ365 in 水戸というイベントのポスター展示なども行った。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して自身のためになったことは、まずはイベントの企画運営の難しさについて一番に実感した。自分たちが考えるよりも前から、物事は考えられていて、企画され、自分たちはあまりかかわることのないまま当日のみの参加となってしまった。これは修得したというよりも今後への反省となってしまった部分が多いが、社会に実際に出ると、反省ばかりではどうしようもないので、今度からはしっかり終点から見据えた計画を立てられるようにしたい。そしてスケジュールの調整、分担決め、話し合いの内容など、社会に出て必要な基本的なところの見直しが必要だと感じた。やはり自分たちは用意されているものに参加させてもらうのではなく、自分からもっと積極的に参加しようという意思を強くもって　行動しなくてはならないことを学んだ。

4．後輩へのアドバイス

私は上の項目にも書いたように、あまり積極的に行動することができず、どちらかというと受け身な行動をとって　しまいがちなところがあった。自分が参加すると決めたら相手方からの連絡を待つのではなく、どん欲に、積極的に行動していってほしいと思う。活動ではないが、メールや電話などの基本的な作法をきちんと学ぶことをおすすめする。直接あって話せない相手ならばなおさらメールの文面や、電話における作法などがこちら側の第一印象をきめてしまう。文面では相手に伝わりにくいことを十分に考え、これから先どのような関係を築いていきたいか十分に考えながら文面や話すことを考えてほしいと思う。

編集後記

今年度のインターンシップは、原則として科目として履修する学生のみに日誌や報告書の義務を課しました。今後学部インターンシップを位置づけるなかで、これが果たして良いのか悪いのか検証の必要があると思います。とにかく皆様お疲れ様でした。（井澤　耕一）

インターンシップ報告会の後、マスコミ内定者と水戸在住全国紙の若手記者を招いて、村上ゼミ主催の「マスコミ就活懇談会」を開催している。2012年から６年目になる。年々、参加者が増え、インターンシップ―就活というマスコミ志望者のサイクルが出来つつあるのを感じる。３年生、２年生の皆さん、まずインターンシップに一歩踏み出してみよう。その決断が一生の仕事を決めるかもしれない。（村上　信夫）

今年も学生たちは、インターンシップを通して大きく成長しました。申込み時には期待と恐れが入り交じっていた表情が、報告会では達成感と自信に変わっていました。幅広い部署の方やＯＢＯＧと交流する機会など、ご高配を賜りました。心より感謝申し上げます。（清山　　玲）

多くの学生から、有意義なインターンシップを体験できたという報告を受けました。報告を通して、受け入れてくださったインターンシップ先の方々が日々業務に誠実に向かっていらっしゃる姿勢や学生に多大な配慮をしてくださったことが伝わって参りました。心から御礼申し上げます。（本山　宏希）

プロジェクト実習Ｄの報告レポートを、昨年度に引き続き今年度も掲載していただけました。学部で実施されているインターンシップの全てを本冊子で一望できますので、これからインターンシップに参加を考えている学生の皆さんにとって朗報です。インターンシップ委員会のご対応に感謝いたします。（神田　大吾）

インターンシップは「何をやらせてもらったか」ではなく、自分が「何を得たか」が重要です。もう一度振り返って思い出してみてください。働く若い人や年配の人、男性や女性、職場の雰囲気…など、どうでしたか？　この体験を次の学びや就職活動にも活かしてください。（小磯　重隆）

【スタッフ】

■人文社会科学部

・学務グループ　　清家　佑華

■キャリアセンター

・センター長　西川　陽子
・専任教員　小磯　重隆
・インターンシップコーディネーター　菊池美也子
・キャリア支援課課長補佐　小泉　崇人
・キャリア支援課専門員　塚田　和男
・就職支援係　鹿志村やよい　石崎三代子　武藤　理也　大髙　義信

茨城大学人文社会科学部